

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク：誕生から大学入学まで

山本, 文明

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

143

(終了ページ / End Page)

190

(発行年 / Year)

2005-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004518>

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク

——誕生から大学入学まで——

Rasmus Rask, a tragic linguist

——his childhood and early education——

山本文明・YAMAMOTO Fumiaki

1. 序説

デンマークの言語学者ラスムス・(クリスチャン)・ラスク (Rasmus (Kristian) Rask) (1787-1832) は悲劇の言語学者であった。ラスクは学問的には二重に悲劇的であった。第一の悲劇は、彼が1814年に懸賞論文としてデンマーク学士院に提出し最優秀賞を受賞した『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』(*Undersøgelse om det gamle Nordiske eller Islandske Sprogs Oprindelse*)の公刊が1818年であったことである。なぜならば、1816年に出版されたドイツの言語学者フランツ・ポップ (Franz Bopp) (1791-1867) による『サンスクリット語の動詞活用組織について』(*Ueber das Conjugationssystem der Sanskritsprache*) が、後にインド・ヨーロッパ語の比較言語学の基礎を築いた最初の書とみなされることになったからである。

第二の悲劇は、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』に使用した言語がデンマーク語であったことである。なぜならば、この画期的なラスクの著書はデンマーク語が利用できる一部の学者にしか読まれなかったからであり、その結果、彼がその中で示した印欧祖語とゲルマン語との子音の対応の法則は、すぐには学界に知られることにはならなかったからである。この法則はヤーコブ・グリム (Jakob Grimm) (1785-1863) による『ドイ

ツ文法』(*Deutsche Grammatik*) 第1巻の第2版(1822)をとおして世に知られることになった。グリムは、ラスクの論文を読んで、『ドイツ文法』の初版にはなかったこの法則に関する記述を第2版に追加したのであるが、使用言語がドイツ語であったことから、グリムの著書は広く世に知られるところとなった。その結果、この法則は発見者ラスクの名前ではなく、法則の紹介者グリムの名前によって、一般には「グリムの法則」と呼ばれることになったのである。

しかし、ラスクの悲劇は上記のような言語学の世界ではよく知られている事実だけに起因するものではない。ラスクの人生そのものが悲劇的であったのである。本稿の目的は、ラスクの人生をたどることによって、この天才言語学者の学問的、世俗的な生き様を問い直すことにある。ラスクについて書かれたものは少なくない。しかし、そのほとんどがデンマーク語で書かれている。そのせいもあってか、ラスクについては、その学問的業績も人間性も一般にはあまり知られていない。複合的なラスクの悲劇性の一端が、言語学のパラダイムを変えてしまうことになる論文がデンマーク語で書かれたことにあるにもかかわらず、ラスクの評伝の類がデンマーク語で書かれているために、ラスクがどのような人生を生きたかは、今日でも、とくにわが国ではあまり知られていないのは残念なことである。北欧の小国のマイナーな言語の情報が十分に伝わらず、19世紀に起こった悲劇が、21世紀になっても相変わらず続いているのは悲しいことである。

筆者は『英語学人名辞典』(1995)と『言語学大辞典』第6巻(1996)のラスクの項の執筆を担当したことがある。しかし、辞典という性質上、与えられた執筆枚数が限られていたために、十分に意を尽くせなかったという後悔の念がある。しかも、どちらも英語学あるいは言語学という専門的な立場からのラスクの業績の解説・評価であり、伝記としてはまったく不完全なもので、ましてやラスクの人間性に言及することはできなかった。また、抜け出そうとしても抜け出せなかった過酷な運命と報われない境遇の中で、ひたすら言語研究に取り組んだラスクのあくなき探求姿勢についても触れることはできなかった。本稿では、その後入手できた資料から得られた情報も加え、言語

学的な視点からばかりでなく、18世紀末から19世紀前半の社会情勢やラスクの周辺の人物についても考慮しながら、ラスクの生き様を描いてみたいと思っている。

最近、キアステン・ラスク (Kirsten Rask) による『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』(*Rasmus Rask—store tanker i et lille land*) (2002) という本がデンマークの出版社から出された。なお、著者は純粹の言語学者ではなく、言語コンサルタントを職業とし、デンマークのNHKとも言うべきテレビ会社デンマーク・テレビで映画の翻訳をしたり、日刊紙ポリティケンで言語関連の書評を担当してきた。彼女は本稿で対象としているラスクと同姓だが、血縁関係はない。この本は、専門家向けの言語学史上の業績の再評価という形ではなく、一般の読者向けに、ラスクの人間性、生き様について紙面の多くが割かれている。これまでのラスク伝、ラスク論が言語学に関わる人達によって書かれてきただけに、人間ラスクに焦点を絞った視点は貴重である。しかし、残念ながらデンマーク語で書かれているため、北欧以外ではあまり注目を集めることはないかもしれない。筆者は、デンマークではラスクが現在でも生きたトピックであることにあらためて感動を覚え、この本を翻訳して日本に紹介することも考えたが、日本人にはあまり関係のないデンマーク特有の事情も含まれており、そのまま翻訳することは日本の風土にはなじまないと考え直した。ここではその内容の一部を紹介しながら、人間ラスクを掘り下げるための参考資料とすることにした。

ラスクの人生について語るとき、必ず引用されるのがネルス・マティアス・ペーターセン (Niels Matthias Petersen) (1791–1862) による評伝である。これは、ラスクの死の翌々年、1834年に、「ラスムス・クリスチャン・ラスクの生涯についての寄稿」(“Bidrag til Rasmus Kristian Rasks levned”) として発表されたもので、ペーターセンの論文集の第1巻に収録されている。ラスクを語る際にペーターセンのラスク伝が不可欠であるのにはふたつの理由がある。ひとつ目の理由は、彼がオーゼンセのラテン語学校・大聖堂学校でラスクといっしょに学び、親しく付き合い、二人の間にはラスクの死の直前まで

信頼関係があったからである。彼はラスクの若いころからの人柄を知悉し、晩年のラスクの精神状態や置かれた社会的環境を直接に知る立場にもいた。人間的にも学問的にもペーターセンを信頼していたラスクは、晩年取り組んでいたデンマーク語の正字法の研究に役立ててもらうために遺産の一部をペーターセンに託した。ふたつ目の理由は、ペーターセン自身が言語研究の専門家であり、ラスクのやり残したアイスランド語関連の作品の一部を引き継ぎ、ラスクの学問的な業績を専門的、客観的に評価することができたことである。

ペーターセンは、オーゼンセラテン語学校・大聖堂学校には1801年から1808年まで在籍し、ラスクより1年後にコペンハーゲン大学に入学した。最初はラスク同様、神学を志したが、次第に北欧語そのものに関心を移した。コペンハーゲン大学の北欧語の初代教授で、専門は北欧の文献学・文学史であった。その著作・論文は数多く、『基語からの発達におけるデンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語の歴史』(*Det Danske, Norske og Svenske Sprogs Historie under deres Udvikling af Stamsproget*) (1829-30)、『有史以前のデンマークの歴史』(*Danmarks Historie i Hedenold*) (1834-37)、『北欧神話』*Nordisk Mytologi* (1844) 等の他、翻訳として『アイスランド人の国内外の旅に関する歴史的物語』(*Historiske Fortællinger om Islændernes Færd Hjemme og Ude*) (1839-44)があり、これはまさにラスクの仕事の継続とも言えるもので、アイスランド語すなわち古ノルド語文献の翻訳である。また、晩年の『デンマーク文学史』(*Bidrag til den Danske Litteraturs Historie*) 全4巻 (1853-61) は、この分野におけるデンマークでの最初のまとまった学問的な労作である。このように北欧・北欧語の文学・歴史に関する幅広い業績を残したペーターセンは、オーゼンセ時代に、古い時代の北欧と古ノルド語に関してラスクから受けた影響が大きかった。その意味で、ペーターセンの語る若き日のラスク像は臨場感に富んでいるのである。

一般に、著書・論文以外で、研究者の人生を知るには、日記や書簡が重要な役目を果たす。ラスクの場合は、残念ながら日記は公開されていない。その理由は不明だが、判読できない筆跡や不鮮明な箇所が多々あるからである。

うか。しかも、ラスクの日記は将来人に読んでもらうための日記ではなく、自分自身の記録としての日記で、あまり良質とは言えないノートにペンで書いたもので、ところどころインクもにじんでいる。保存状態もあまりよくない。残っている日記の書かれた時期は、1816年10月25日からラスクがこの世を去る1932年の9月23日に至っている。数ページにわたって書かれた日もあれば、一行だけの日もある。何日分かをまとめて書いた後に、欄外に該当する日付だけをアラビア数字で示した箇所も多い。日記というより覚書という体裁である。現物は王立図書館に保管され、閲覧も可能である。また、海外からもマイクロフィルムの形で利用することができるが、その判読は容易ではない。重要な第一次資料であるだけに、専門家による判読と公刊を期待したい。

日記に対して、ラスクの手簡集は公刊されている。これは『ラスク手簡集』(*Breve fra og til Rasmus Rask*)と題して、ルイ・イエルクスレウ (Luis Hjelmstev) (1899-1965) とマリーエ・ビエロム (Marie Bjerrum) が編集したものである。第1巻と第2巻 (1941) がイエルクスレウ編の手簡集となっており、1805年にラスクが友人のH.J.ハンセン (H.J.Hansen) に宛てた手紙の草稿から、死のひと月前の1832年10月11日に大学とグラマースクールを担当する高等教育の部局に宛てた手紙までの1,039通の手簡が収録されている。ラスクが一方的に出した手紙もあれば、相手とのやり取りがよく分かる往復手簡も含まれている。グリム兄弟、とくに兄のヤーコブ・グリムとの往復手簡は、当時の言語学の状況の一端を示すものとして興味深い。なお、第1巻にはイエルクスレウの序文がある。

第3巻 (1968) は、ビエロムの編になり、前半と後半の2冊に分かれている。前半はそれぞれの手簡に対する注、後半は人名索引、項目索引等から成っているが、とくに、現在では知ることが難しくなっている手簡に登場する人物の経歴やラスクとの関係が解説されていて、極めて貴重な資料となっている。ビエロムは、1951年以来、イエルクスレウの協力者として働いていたが、1966年のイエルクスレウの死後、最終的に第3巻をまとめた。なお、彼女は『デンマーク語に関するラスムス・クリスチャン・ラスクの諸論文』

(*Rasmus Kristian Rasks Afhandlinger om det danske sprog*) (1959) で学位を取得した他、「なぜラスクは1810年にスウェーデンに行かなかったのか」(“Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?”) (1956)、「なぜラスクはコーカサスとインドへ旅立ったか」(“Hvorfor rejste Rask til Kaukasus og Indien?”) (1957) 等のラスクに関する論文を発表し、ラスクの人生の転機となった出来事についての疑問点を解明しようとしている。『デンマーク人名辞典』(*Dansk biografisk Leksikon*) 第3版の第11巻(1982)のラスクの項の執筆担当者も、ピエロムである。とくに、『デンマーク語に関するラスムス・クリスチャン・ラスクの諸論文』は、タイトルから受ける印象よりははるかに幅が広い内容で、ラスクの言語観が詳細に検討され、グリムとの関係を論じた項も大変参考になる。ラスク研究には欠かせない書である。

なお、イェルムスレウは、1899年生まれのデンマークの言語学者で、ヴィルヘルム・トムセン (Vilhelm Thomsen) (1842-1927: 教授在任期間1887-1913)、ホルガー・ペーザーセン (Holger Pedersen) (1867-1953: 教授在任期間1914-1937) の後を受けて、1937年にコペンハーゲン大学の比較言語学の教授の地位に就いた。『一般文法の原理』(*Principes de grammaire générale*) (1928)、『言語理論の基礎について』(*Omkring sprogteoriens grundlæggelse*) (1943)、『言語: 序説』(*Sproget, en Introduktion*) (1966) 等の著書がある。トムセンとペーザーセンは比較言語学者として華々しく活躍し、コペンハーゲン大学の言語学の存在を世界に誇る地位に引き上げたが、イェルムスレウは、スイスの言語学者フェルディナン・ドゥ・ソシュール (Ferdinand de Saussure) (1857-1913) の影響を受け、構造言語学に研究の中心を移した。イェルムスレウの提唱した言語の形式と機能を重視したグロセマティックス (Glossematics) の研究グループは、コペンハーゲン学派と呼ばれ、コペンハーゲン大学は一時期構造言語学の中心地のひとつとなった。グロセマティックスは構造言語学の一派としては有名になったが、グロセマティックスが頓挫した結果、伝統の比較言語学は廃れ、イェルムスレウの退官後、コペンハーゲン大学では比較言語学教授のポストは消滅し、現在に至っている。

トムセン、ペーザーセン、イェルムスレウは、比較言語学者の立場から、

ラスク論を書いている。トムセンのラスク論「ラスムス・クリスチャン・ラスク」(1887)は、生涯に55ヶ国語を研究したと言われるラスクの言語研究の目的は、まず第一に、文法構造と語彙の比較に基づく諸言語の発生的な分類で、ラスクの功績は言語類型論の確立に貢献したことにありと指摘したもののだが、元来屈折語のインド・ヨーロッパ語族ばかりでなく、膠着語であるアルタイ語族のトルコ語やウラル語族のフィンランド語にも通じたトムセンならではの見解である。なお、この論文は『ヴィルヘルム・トムセン論文集』(*Vilhelm Thomsen Samlede Afhandlinger*)の第1巻(1919)に収録されている。また、トムセンは、当時デンマーク最大の全26巻のサルモンセン百科事典(*Salmonsens Konversations Leksikon*)第2版(1915-30)の第19巻(1925)で、ラスクの項を執筆している。この百科事典の言語学関連の項目の執筆者は錚々たるメンバーで、当時のデンマークの一流の言語学者がずらりと名を連ねている。例えば、トムセンが、印欧語、フィンランド語、ラテン語、ロシア語、トルコ学等の項、言語学者では、ラスクの他、A.シュライヒャー(A. Schleicher) (1821-68)、J.シュミット(J. Schmidt) (1843-1901)の項を書いている他、ペーザーセンが、アルバニア語、ギリシャ語、ケルト語、リュキア語、スラブ語、トカラ語等を担当している。因みに、初版(1893-1911)には「グリムの法則」の例外を説明した「ヴェルナーの法則」の発見者、コペンハーゲン大学のスラブ語教授カール・ヴェルナー(Karl Verner) (1846-96)も執筆者に顔を連ねている。

ペーザーセンは、『言語学史の展望』(*Et Blik på Sprogvidenskabens Historie*) (1916)の中で、ラスクのゲルマン語の子音推移の法則の発見の功績を強調し、比較言語学史上の音韻論の確立に功績があったと主張し、『19世紀の言語学：方法と結果』(*Sprogvidenskaben i nittende Aarhundrede: Metoder og Resultater*) (1924)の「比較言語学の初期」という節でも、ラスクについて7ページにわたって解説しながら、同様の説を展開している。ペーザーセンの見解に関しては、ヤコブ・スヴェルドロブ(Jakob Sverdrup)が『言語学史について、イーレーラスクーグリム』(“Av Sprogvidenskabens Historie. Ihre-Rask -Grimm”) (1920)において、ラスクの目的は言語の発生的関係

を証明することにより、比較言語学の発展にはポップとグリムの方に功績が認められると批判した。その後、パーザーセンは、ラスクの没後100年を記念して出版されたイェルムスレウ編『ラスムス・ラスク精選論文集』(*Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*) 全3巻(1932)に、40数ページの序論を書き、自説に修正を加えながら、ラスク像を描き出している。イェルムスレウは、上記の論文集やすでに述べたラスクの書簡集を編集した他、ラスクが言語学者として自立していく過程で重大な転機となったスウェーデンとの係わり合いを「ラスムス・ラスクとスウェーデン1812-18」(“Rasmus Rask og Sverige 1812-18”) (1933)で描き、「ラスクの生涯と業績についての論評」(“Commentaire sur la vie et l'œuvre de Rask”) (1951)では、構造言語学の視点からラスクの業績の学問的価値を論じ、トムセン同様、ラスクの言語類型論的な言語の分類における功績を強調している。この三代にわたるコペンハーゲン大学の比較言語学教授のラスク論は、言語学史におけるラスクの学問的な位置を知る際に、決して欠かすことのできないものである。

ラスクの評伝で忘れてはならないものに、わが国の英語学・英文法研究に多大な影響を与えたコペンハーゲン大学の英語学教授オットー・イエスベルセン (Otto Jespersen) (1860-1943) の『ラスムス・ラスク』(*Rasmus Rask*) (1918) がある。これはラスクの『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源に関する研究』(1818)の公刊100年を記念して出版されたものである。内容は、イエスベルセンらしい明晰な語り口で、「幼年時代」、「青年時代」、「インドへの旅」、「帰国後」、「評価」の5つの章に分け、一般の読者を対象に簡潔に解説されている。なお、そのうち「幼年時代」と「青年時代」の章については、新谷俊裕氏による詳しい語学的な解説がつけられた邦訳(1988)がある。イエスベルセンは、ラスクの没後ちょうど百年目の命日である1932年の11月14日の新聞 (Politikens Kronik) にも、ラスクを偲ぶ特集記事を書いている。さらに、イエスベルセンは、その代表的著作のひとつ『言語：その本質、発達、起源』(*Language: Its Nature, Development, and Origin*) (1922) の第2章「19世紀初頭」に、近代言語学の基礎を築いたフリードリッヒ・フォン・シュレーゲル (Friedrich von Schlegel) (1772-1829)、グリム、ポッ

プ、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt) (1767–1835) と並んで、ラスクの解説をし、『言語の発達と起源』(*Sprogets Udvikling og Opståen*) (1926) の中でも、ポップおよびグリムと比較しながらラスク論を展開している。

イエスベルセンが、ラテン語学校に在学中にラスクの伝記を読み感動したことが、後に言語学に志す動機となったことはよく知られている。その自叙伝『ある語学者の生涯』(*En Sprogmands Levned*) (1938) において、ヘブライ語を学び始めたがあまり興味をもてなかったときに、ラスクの伝記を読み「…彼のアイスランド語文法と読本を手に入れ、パラダイムを暗記し、テキストを少し読んだ…」と書いている。なお、ラスクが通ったラテン語学校のところでも述べるが、デンマークのラテン語学校では、伝統的にキリスト教と関連づけて、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語が教えられていた。イエスベルセンは、恩師トムセンに認められて、若くしてコペンハーゲン大学の英語学教授になったが、若き日の感動の日から数十年後に、功成り名を遂げた言語学者として、ラスクの伝記を書いたときの感慨はいかばかりであったろうか。なお、イエスベルセンは上記のサルモンセン百科事典にも実に多くの項目を担当しており、言語、言語学、一般言語学、言語教育、正字法、英語、国際補助語、エスペラント、音法則、膠着語、孤立語、総合語、分析語、多総合語等の項目を始め、当時はまだ一般になじみの少なかった数多くの音声学関連の用語を解説している。

トムセン、ペーザーセン、イェルムスレウ、イエスベルセンとラスク論を書いた著名な言語学者の名前を挙げたが、彼らほど知られてはいないが、コペンハーゲン大学の北欧語文献学教授であったルズヴィ・F.A.・ヴィマー (Ludvig F. A. Wimmer) (1839–1920) のラスク論、『ラスムス・クリスチャン・ラスク』(*Rasmus Kristian Rask*) (1887) も、20ページの短い論評ながら、バランスの取れた情報を提供してくれる。とくに、ラスクとグリムとの関係について、『同じ愛国的な感情も確かに深く根ざした原因となって、ラスクとグリムとの間に、最も愛国的なデンマーク人と最も愛国的なドイツ人との間に、真の友情が生まれ得なかったのである。』という一節は、両者の微妙な関

係を明解に表わしている。ヴィマーは、ラスクの足跡を追って比較言語学を学び、古デンマーク語の名詞の屈折の研究によって学位を得た後、『古ノルド語文法』(*Oldnordisk Formlære*) (1870)、『古ノルド語読本』(*Oldnordisk Læsebog*) (1870)、『デンマークのルーン文字碑文』(*De Danske Runemindesmærker*) 全4巻 (1895-1908) 等の著作がある。

ラスクの死の翌年、故人を親しく知るものによって書かれるべきネクロロジーを書いたのは、ペーター・エラスムス・ミュラー (Peter Erasmus Müller) (1776-1834) であった。当時、まだ日記や書簡類の整理もされていない状況にあり、ラスクの家族関係にも不明な点があったが、最も早いラスクの評伝と言える。ミュラーは、コペンハーゲン大学の神学教授であり福音ルター派の聖職者であったが、同時に歴史家、言語学者でもあった。何よりも特筆すべきは、ラスクの書簡集に名前が出てくる頻度が最も高い人物のひとりであることである。すなわち、ラスクの生活面を知る上で非常に重要な人物で、資料として忘れることはできない。ミュラー自身は、あたかも遺書であるかのようにラスクのネクロロジーを書いた翌年、この世を去った。

ラスクのオーゼンセの学校時代からの友人ペーターセンの「ラスムス・クリスチャン・ラスクの生涯についての寄稿」が、若き日のラスクの生き方を知る上で貴重な資料であることはすでに述べたが、ラスクの没後100年を記念して書かれた、ハンス・H.フッスィング (Hans H.Fussing) の「ラスキアーナ」(“Raskiana”) (1932)も、ラスクのオーゼンセ時代を知る上で示唆に富んだ資料である。ペーターセンのラスク伝が、友人同士の係わり合いの観点からのラスク像であるのに対して、フッスィングの論文は、オーゼンセ大聖堂学校時代の教師がどのようにラスクのことを見ていたのかを知る上で、また、それまでに公にされていなかった情報の追加という点で、重要である。ラスクを直接教えた教師たちによって学校の記録簿に記載された、ラスク少年に関する人物評は、極めて興味深い。

また、フレゼリク・レニング (Frederik Rønning) (1851-1929) の『ラスムス・クリスチャン・ラスク』(*Rasmus Kristian Rask*) (1887) も貴重な情報源である。ラスクの生誕100年を記念して出版されたこの本は、「この書の目的

は、ラスクの生涯とラスクの言語学者としての意味をだれにも分かるように示すことである。」と、前書きの冒頭にあるように、書簡や日記を基に書かれたラスクの評伝である。レニングは、ラスクの言語学者としての意味を、(1)『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』(*Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*)、(2)『アイスランド語あるいは古ノルド語の起源に関する研究』、(3)『科学的デンマーク語正字法の試み』(*Forsøg til en videnskabelig dansk Retskrivningslære*)の3つの著作に集約してしている。まず第1のアイスランド語文法は1811年、第2の比較言語学の礎となったアイスランド語の起源の研究は1818年、最後のデンマーク語の正字法の試みは1826年に、出版されていることから分かるように、時期的にラスクの関心の軌跡を表わしているからである。すなわち、ラスクが、古い北歐文化・古ノルド語への深い関心を出発点とし、広く世界の言語の文法構造を比較研究し、母語のデンマーク語に戻った時間の流れを、3つの著書が象徴的に表わしていると言えるからである。ただし、ラスクは、ラテン語学校に在学していたころから、すでに多くの言語を習得し、デンマーク語の正字法にも一家言を持っていたので、これらの3つの分野は、ラスクの中では有機的につながっていたと認識しておく必要があるが、レニングの著作はラスク伝の古典のひとつとして、忘れてはならない資料である。なお、レニングは、古英語の叙事詩『ベオウルフ』(*Beowulf*)の研究で学位を取ったが、もっぱらデンマーク文学史を専門とし、とくに聖職者であり詩人であり、しかも、ラスクとも係わりのあったニコライ・フレゼリク・セヴェリン・グルントヴィ (Nikolaj Frederik Severin Grundtvig) (1783-1872) を研究した。

また、ラスクの業績全体を詳細にまとめた集大成として、パウル・ディザリクセン (Paul Diderichsen) (1905-64) による『ラスムス・ラスクと文法的伝統』(*Rasmus Rask og den grammatiske tradition*) (1960) がある。これはイエラムスレウに捧げられた著作で、序文の冒頭に、「この研究はルイ・イエラムスレウから受けた示唆によるものである。イエラムスレウは、自身の構造的言語理論が熟した1930年以後の円熟期に、ラスクの精選論文集や書簡集を出版し、講義や講演でラスクの生涯と業績についての新しい基本的考え方を

概説した。イェルムスレウは、ラスクが残し、実際にこれまで研究に利用されなかった整理されないままの膨大な覚え書きのすべてに目を通した。…故に、明言できることことは、ラスクについて広くて深い見識を持った者は過去にも現在にも他にはいないということである。」という記述がある。ディザリクセンは、グロセマティックスの共同研究者としての長年にわたるイェルムスレウとの交友の中で、ラスクに対するイェルムスレウの思い入れを理解し、感謝の気持ちを込めてこの本を書いたのである。内容は、トムセン、ペーザーセン、イェルムスレウ等の評価を踏まえて、ラスクがオーゼンセ時代に受けた教育、ラスクの言語観、ラスクの功績を詳説したものであるが、ラスクの原点がオーゼンセ大聖堂学校でギリシャ語とラテン語を教えた、後述するセーレン・N.J.ブロック (Søren N.J. Bloch) (1772-1862) の言語観にあることを指摘していることが興味深い。また、この本の最後では、ラスク伝を書いたペーターセンの遺稿の中から、晩年のラスクがコペンハーゲン大学で教授職を求める際のいきさつや、当時のラスクの収入に関する具体的情報が示されていることも面白い。なお、ディザリクセンは、コペンハーゲン大学のデンマーク語教授で、その『基礎デンマーク語文法』(*Elementær Dansk Grammatik*) (1946) は、デンマーク語の統語論を解明したデンマーク語文法の古典としてその価値を今も保っている。また、デンマーク語の辞書としては最大の『デンマーク語辞典』(*Ordbog over det Danske Sprog*) 全28巻 (1930-48) の編集にも携わった。

その他のラスク情報の中で、目についたものを2、3挙げる。ホルガー・P:N.デュッグヴェ (Holger P:N. Dyggve) の「これまで印刷されていないラスムス・ラスクの3通の手紙」(“Tre ikke tidligere trykte Breve fra Rasmus Rask”) (1932) は、それまでに公表されていなかったラスクの手紙、1通はフィンランドの言語学者アンデルス・ヨハン・シェーグレン (Anders Johan Sjögren) (1792-1855) に宛てた1819年のスウェーデン語の手紙、2通目もシェーグレン宛だが、これは11年後の手紙で使用言語はデンマーク語になっている。3通目は、ヘルシンキ大学のフィンランド語講師カール・アクセル・ゴットルンド (Carl Axel Gottlund) (1796-1875) に宛てた短い手紙で、フ

インランド語の格組織に触れたものだが、デンマーク語で書き始められ、途中からスウェーデン語に変わるという奇妙なものである。ウプサラ大学での学生生活を含めて長くスウェーデンに滞在したフィンランド人には、スウェーデン語の方がなじみが深いことを途中で思い出したのであろうか。これらの手紙は、その後イェルムスレウ・ビエロム編『ラスク書簡集』に収められた。

Kr.コーロン (Kr.Kålund) 「ラスムス・ラスクの生涯についての寄稿」 (“Bidrag til Rasmus Rasks lævned”) (1897) も、新しく発見された2通の手紙についての情報の追加だが、どちらもラスクの死後の1836年に書かれたもので、差出人はアイスランド人、ビャルトニ・ソルステインソン (Bjarni Thorsteinsson) (1781-1876) とスヴェインビョルトン・エーギルスソン Sveinbjörn Egilsson) (1791-1852) で、受取人はラスクがめんどうをみ、一番多くの遺産を残した異母弟ハンス・クリスチャン・ラスク (1805-75) である。二人ともラスクの心を許した友人であったことから、生前のラスクを偲ぶ話が貴重な情報となっている。また、カール・C.クリステンセン (Carl C. Christensen) 「ラスムス・ラスク——その死と後に残したもの」 (“Rasmus Rask – Hans død, og hvad han efterlod sig”) (1932) は、極めて風変わりな寄稿である。サブタイトルの「その死と後に残したもの」と聞けば、人は学問的遺産を想像するのが普通だが、ここで扱われているのは、本当のラスクの遺産の話である。葬式の費用から異母兄弟への遺産の分配まで、細かな収支決算が記されている。因みに、ラスクは貧困の中で死んだように思われているが、実際には当時のコペンハーゲン大学教授の給料の3~4年分の遺産があったことはあまり知られていない。

なお、すでに触れたようにラスクの生誕や没年を記念して発表された著書や論文がいくつかあるが、それらを整理して示せばつぎのようになる。ラスクの生誕100年を記念して1887年に出されたものには、レニング、トムセン、ヴィマーがあり、ラスク没後100年を記念して1932年に出されたものには、クリステンセン、デュッグウェ、フッスィング、イエスペルセン、ペーザーセンがあり、さらに、『アイスランド語あるいは古ノルド語の起源についての

研究』(1818)出版の100年目を記念して出されたものとして、イエスベルセンを追加することができる。

最後になるが、わが国で発表されたラスク論としては、秦宏一氏による「ラスムス・ラスク」(1975)が最も核心を突いている。ここでは、トムセン、ペーザーセン、イェルムスレウと3代続いたコペンハーゲン大学の比較言語学教授のラスク評価の変遷が、明解に解説されている。すなわち、トムセンの見解は、ラスクの真価は、歴史文法を研究したグリムと言語形態の発生論的研究のポップに対して、言語類型論の確立とその実践にあるというもの、ペーザーセンの見解は、ラスクこそゲルマン語子音推移の法則の発見者であり、史的音韻論の創始者であるというもの、イェルムスレウの見解は、ラスクの言語研究を貫く思想は、グリムやポップとは異なり、言語類型論で、その立場から諸言語を分類したというものである。

本稿が目指すラスク伝は、主として以上の資料を参考にして成り立つものであるが、その他の参考資料は、参照したラスクの著書・論文とともに最後に挙げる参考文献の一覧に示すことにする。

2. 誕生からコペンハーゲン大学入学まで

ラスクは、1787年11月22日、デンマークのブレネキレ (Brændekilde) という村で生まれた。デンマークはヨーロッパ大陸と陸続きのユトランド半島といくつかの島から成り立っている。古来、デンマークの文化の中心となってきた都市は、シェラン島にあるコペンハーゲン、フューン島にあるオーゼンセ、ユトランド半島にあるオーフスで、現在これらの都市にはそれぞれコペンハーゲン大学、南デンマーク大学 (1998年に近隣の教育・研究施設を統合して再編成された大学で、それまではオーゼンセ大学と呼ばれていた)、オーフス大学が置かれ、デンマークの学術の中心となっている。現在デンマークには12の大学があるが、コペンハーゲン、オーゼンセ、オーフスの3都市が長くデンマークの学問の中心であった。ラスクが生まれたブレネキレは、ユトランド半島とシェラン島の間に位置するフューン島の中心都市オーゼン

セの南西数キロに位置する小さな村で、当時はまったく世に知られてはいなかった。現在ではすでに村ではなくなり、オーゼンセ郊外のブレネキレ教区としてその名を残している。

ラスクが生まれた1787年ごろの世界情勢を概観してみよう。最初の世界大戦とも呼ばれる七年戦争（1756-63）後のパリ和約でフランスが北アメリカのすべての植民地をイギリスに割譲したのが1763年、現在のアメリカ合衆国が宗主国イギリスから独立を宣言したのが1776年、パリ講和条約によってその独立が認められたのが1783年、フランス革命の勃発が1789年、フランス王ルイ16世が処刑されたのが1793年のことであった。また、日本で、天明の大飢饉（1782-87）の後、松平定信が寛政の改革に着手したのが1788年であった。そして、言語学にとって何より大きな出来事は、ラスク誕生の前年の1786年に、インド在住のイギリス人、ウィリアム・ジョーンズ（William Jones）（1746-94）が、「インド人について」というカルカッタでの講演の中で、「サンスクリット語は、その古さがどのようでありましょうとも、驚くべき構造をもっております。サンスクリット語は、ギリシャ語より完全であり、ラテン語より豊富であり、両言語よりずっと精密であります。しかも、両言語とは、動詞の語根においても文法の形式においても、偶然に生み出されたとは思えないほど有力な類似性をもっております。その類似性は実際あまりにも有力なので、どんな言語学者でも、これら3つの言語を調査したら、おそらくもはや現存してはいないかもしれない、ある共通の源から発生したと信じないではいられないでありましょう。それほど強力ではないかもしれませんが同じような理由で、ゴート語とケルト語も、非常に異なった言語と混じりあってはいますが、サンスクリット語と同じ起源をもっていると推測できるのであります。」と述べたことであった。ヨーロッパの諸言語の源と考えられてきたギリシャ語・ラテン語と、当時のイギリスの植民地であったインドの言語、サンスクリット語との系統的な近親性、さらにはゲルマン語やケルト語との近親性も示唆されたのである。これは当時の言語学界にとっては衝撃的な内容であった。無関係だと思われていた言語間に血縁関係が存在

する可能性が示されたことで、言語の起源への関心が一気に高まったことは言うまでもない。ラスクがデンマークで生を受けたのは、そのように言語学の世界でインドのサンスクリット語が注目され始めた時期であった。

当時のデンマークは、激動の時代を経験していた。まず、1396年以来の北歐同盟、いわゆるカルマル同盟は、1523年に後にスウェーデン国王となったグスタフ・ヴァーサ (Gustav Vasa) (在位期間：1523-60) が率いる独立戦争で破棄され、スウェーデンとの確執が始まっていた。宗教改革はすでに1536年に、クリスチャン3世 (Christian III) (在位期間：1534-59) によって強引に実行され、国内的にはキリスト教はルター派のプロテスタントに統一されていたが、ドイツで起こった北部のプロテスタントと南部のカトリックとの間の30年戦争 (1618-48) に、クリスチャン4世 (Christian IV) (在位期間：1588-1648) の治世の1625-29年に参戦したのである。かくして、デンマークは、北ドイツでの影響力を増すために、スウェーデンと覇権を争う形となったが、結果は、成功裏にことを選び国力を増強したスウェーデンとは対照的に、多くの領土を失い、著しく国力を低下させることになった。その反面、クリスチャン4世は商業を重視し後の工業化への礎を築き、国内に多くの後世に残る建造物を建て、海軍の再装備に努めたので、経済は活発化し、デンマークの諸都市は急速な発達をとげた。現在もコペンハーゲンに残っているローセンボー城 (Rosenborg Slot)、円塔 (Rundetårn) やその隣にある学生寮レゲンセン (Regensen) は当時の建築物である。レゲンセンは多くの著名人を排出しているが、その代表的人物の一人がラスクであることは言うまでもない。なお、当時デンマーク領であったノルウェーのオスロが一時期クリスチアニアと呼ばれたのはクリスチャン4世に因んだものである。

クリスチャン4世の治世の末期から1740年頃までは厳しい時代が続き、物価は上がり、デンマーク社会はだんだん貧しくなった。1654年にはコペンハーゲンにペストに見舞われ、夏だけで1万人が死亡した。これは当時のコペンハーゲンの人口の3分の1であった。コペンハーゲンは1711年にもペストに見舞われ、このときも人口の3分の1が命を失った。1726年には、ユトランドの

中心都市のひとつヴィボーに大火が起り、1728年にはコペンハーゲンも大火にみまわれ、市街地の約3分の2が焼け落ちた。また、デンマークでは1660年から19世紀半ばまで絶対王政が続き、一方的な王の意向による無益な戦争の影響もあった。とくに、1657年から1720年までは断続的にスウェーデンとの間に戦争があった。まず、1657年にデンマーク王フレゼリク3世 (Frederik III) (在位期間：1648-70) は、父クリスチャン4世が失った領土の回復をもくろんでスウェーデンに宣戦布告をした。ところが、異常気象でデンマークとスウェーデンとの間の海が凍り、海軍に頼るデンマーク軍は水上を進軍したスウェーデン軍に圧倒され、2年以上もコペンハーゲンを包囲される等の負け戦が続いた。最終的には、スウェーデン王カール10世グスタフ (Karl X Gustav) (在位期間：1654-60) の急死により1660年に講和条約が結ばれたが、デンマークは、元来デンマーク領であったスカンディナビア半島南部のスコネ地方を失うことになった。つぎに、1675年～1679年にはスコネ戦争が起り、フレゼリク3世の長男クリスチャン5世 (Christian V) (在位期間：1670-99) は、スコネ地方に進軍し、一時はその大部分を占領したものの、結局は、スウェーデンを支持したフランス王ルイ14世が、スカンディナビア半島の現状維持を主張したため、デンマークは再びスコネ地方を失うことになった。さらに、1709年～1720年には大北方戦争があり、クリスチャン5世の長男フレゼリク4世 (Frederik IV) (在位期間：1699-1730) は、再びスコネ地方に進軍したが、そこではすでにスウェーデンの法律が施行されており、住民もスウェーデンに対して帰属意識をもっていたためにデンマークは敗北し、永久にスコネ地方を失うことになった。数十年に及んだ対スウェーデン戦争は、一方的にデンマークが領土を失うという結果に終わった。この一連のスウェーデンとの確執は、スウェーデンに対するデンマーク国民の根強い怨念を生むことになった。

1750年以降、産業の発達によってヨーロッパの人口が増加したが、デンマークでも近代化の基礎が築かれ始めた。クリスチャン6世 (Christian VI) (在位期間：1730-46) の跡を継いだフレゼリク5世 (Frederik V) (在位期間：1746-88) は、アルコール依存症で政治的には無能であったが、A.G.モルト

ケ (A.G.Moltke) やJ.H.E.ベアnstorf (J.H.E.Bernstorff) 等の有能な側近のおかげで、ヨーロッパ全体の景気と歩調が合い、デンマーク経済は好調であった。オーストリアの王位継承に端を発しヨーロッパと新大陸を巻き込んだ七年戦争で、中立を保ったことも経済の発展につながった。王立劇場や現在の王室の居城であるアマーリエンボー城 (Amalienborg Slot) が建設されたのもこの時期であった。フレゼリク5世の跡を受けた長男クリスチャン7世 (Christian VII) (在位期間: 1766-1808) は、早くから統合失調症を患い、政治の実際は側近任せであった。この時代で特筆すべきは、農地の解放が行われたことである。1788年に、それまで地主に縛られて土地を離れられなかった農民を解放したのである。農民が、小作人としてではなく、自分の農地を耕作できるようになったおかげで、労働の意欲が増すと同時に自由の空気が広がり、デンマークの農業は飛躍的に発達しようとしていた。絶対王政時代の身分制度の下で、貴族、聖職者、市民の下に置かれた農民の間に、活気が出てきたのである。当時フランスから入ってきた啓蒙思想も、絶対王政という枠組みの中で身分間の協調関係を生み出していた。このように、ラスクが生まれたのは、社会的には、スウェーデンとの覇権争いに敗れて多くの領土を失ったデンマークが、スウェーデンに対する恨みを抱きつつ、暗くてつらい時代を脱し、他のヨーロッパ諸国とともに大きく変わろうとしていたときであった。

ラスクは、ブレネキレの農家であり仕立て屋であった父ネルス・クリスチャン・ハンセン・ラスク (Niels Christian Hansen Rasch) と母ビアテ・ラスムスタター (Birthe Rasmusdatter) の第3子として生まれた。名字の発達は、他のヨーロッパの国々に比べて、北欧では遅い。現在でも、アイスランドでは名字はなく、父親の名前と関係づけて名乗る伝統的な「父称」が依然として用いられているほどである。このアイスランドの父称の習慣によると、兄妹でも、男の子は父親の名前の後に-son 「……の息子」、女の子は父親の名前の後に-dóttir 「…の娘」をつけて呼ばれる。例えば、父親の名前がエイナル (Einar) で息子の名前がグンナル (Gunnar)、娘の名前がアンナ (Anna) だ

とすれば、グンナルは「エイナルの息子のグンナル」(Gunnar Einarsson)、アンナは「エイナルの娘のアンナ」(Anna Einarsdóttir)となる。名字の確立した国々のように、兄妹が同じ名字とはならないのである。アイスランド語の-sonは、デンマーク語では-sen(英語のson「息子」に対応)となり、-dóttirはデンマーク語では-datter(英語のdaughter「娘」に対応)となる。したがって、ラスクの父Niels Christian Hansen Raschは、「ハンスの息子のネルス」を意味するNiels Hansenが核となる氏名であった。ネルス・ハンセンの父親、すなわちラスクの祖父は、Hansが名前で、ハンス・クリスチャン・ラスムッセン(Hans Christian Rasmussen)と呼ばれていた。中間のChristianは少なくとも祖父以来、ラスク家で伝統的に男の名前に添えられていたようである。また、最後のRaschは、いわばあだ名のようなもので、「すばやい」(現在のデンマーク語では形容詞rask「すばやい、生き生きとした」に対応している)を意味していた。これに関しては、キャステン・ラスクは、これは戦場での果敢な行為から来たあだ名ではないかと想像している。あだ名が名字として固定した例である。北欧では、古来名前の後にその特徴を表わすあだ名を付ける習慣があった(アイスランド語の例で示せば、Leifr heppni(= Leif the Lucky)「幸運者のレイフ」、Eiríkr rauði(= Eric the Red)「赤毛のエリク」、またデンマーク語でも、『デンマーク人の事績』(*Gesta Danorum*)を書いた歴史家サクソ・グラマティクス(Saxo Grammaticus)「学者のサクソ」の他、歴代の王もden gamle(= the Old)「年老いた」、den store(= the Great)「偉大な」、den gode(= the Good)「善良な」、den hellige(= the Holy)「聖なる」等の形容詞を名前の後に付けて呼ぶ場合があった)。確かに、父ネルスは2度戦争に行き活躍した。ネルスの母方の祖父も、大北方戦争でのスウェーデンとの戦争で手柄をたて、褒美として王からオーゼンセ郊外に土地を与えられた事実が、1818年2月24日付のスウェーデン人の牧師で教育評論家だったA.J.D.クナッティンギウス(A.J.D.Cnattingius)(1792-1864)宛のラスクの手紙に書かれている。おそらく、ラスクの祖父は「敏捷者のハンス」と呼ばれていたのであろう。ただし、祖父の代には最後にRaschがつけられた記録はないので、単なるあだ名で、まだ名字として確立してはいなかったようである。Raschが名字に

なったのは、父親の代からであったと思われる。当然、ラスクの母Birthe Rasmusdatterは「ラスムスの娘のビアテ」を意味し、父親の名前がラスムス (Rasmus) であったことを示している。

ラスクは、教会ではラスムス・クリスチャン・ネルセン・ラスク (Rasmus Christian Nielsen Rasch) と名づけられたが、本来の呼び名では、Rasmus Nielsen、すなわち、「ネルスの息子のラスムス」であった。ラスクの家系の男の名前だけに注目すると、Rasmus (Nielsen) (本人) ←Niels (Hansen) (父) ←Hans (Rasmussen) (祖父) ←Rasmus (曾祖父) となり、ラスクの名前は、曾祖父の名前を取ったか、あるいは、母親の父の名前から名づけられたのであろう。デンマークには、オプカレルセ (opkaldelse) と呼ばれる先祖あるいは近親者の誰かに因んで命名する習慣があるからである。因みに、早世したラスクの兄はHans Nielsenで、祖父の名前を取っていた。父の代から、Raschが名字になってからは、-senが付く父称は不要となり、ネルス・(クリスチャン)・ラスク、ラスムス・(クリスチャン)・ラスクが氏名として定着することになった。なお、RaschがRaskとなり、ChristianがKristianとなった経緯については後述する。

父ネルス・ラスクは一生のうちに3度結婚した。最初の妻との間にメッテ・マリーエ (Mette Marie) という娘をもうけたが、妻は出産の8日後に世を去った。一家に妻がいらないのは不都合だと感じたのであろう、ネルス・ラスクは2ヵ月後に、ビアテ・ラスムスダトールと再婚し、夫婦の間には4人の子供が生まれた。長女がマーアーン (Maren)、長男がハンス、次男がラスムス、次女クリスチャンヌ (Christianne) であった。しかし、そのうちの3人は早世し、ラスムスだけが残ることになる。次女クリスチャンヌは生後数週間で急逝した。マーアーンとハンスの死に関して、キアステン・ラスクは次のように書いている：「1796年のある日の昼頃、ブレネキレでは家族が集まっていたが、13歳のハンスは庭に出たまま、食卓に着こうとしなかった。他の子供達がハンスに声をかけたが、言うことを聞かず、家に入ろうとしなかった。結局、父親が呼びに行くことになったが、ハンスは「私に見えるものを父さんも見たら、ほっといてくれるでしょう。」と言った。「それじゃ、何が見えるんだ

い？」と父親が尋ねると、「天が開き、イエスの足を洗っている弟子たち。」と答えた。その夜、ハンスは具合が悪くなった。姉のマーアンは、「お前が死ぬなら、私もいっしょに行きたい。」と言った。そしてそのとおりになった。ハンスは1796年5月22日に死に、その3日後マーア人もこの世を去ったのである。なんと不可思議な話だが、それほど彼らの死が唐突で、異常なものであったということであろう。二人ともまだ15歳にも満たなかったのである。

第1子と第2子を立て続けに失った父ネルス・ラスクは、天に向かって威嚇するように「神は、いくらかは望みがあった者たちを私から奪い、くずを残すのか。」と言ったと伝えられている。ネルス・ラスクの失望とそれまで二人にかけていた期待の大きさは、二人目の妻ビアテの死後に迎えた三人目の妻との間にできた子供たちが、前述のオブカレルセによってハンス（・クリスチャン）とマーアンと名づけたことでも知られる。後年、ラスクはこの早世した兄と同名の異母弟ハンス（・クリスチャン）・ラスクのめんどろをみることになり、コペンハーゲン大学を卒業し聖職者となったハンスの方も、ラスクの死後、その恩に報いるために論文集の編集をすることになる。このとき8歳だったラスクが、この父親のせりふを直接聞いたかどうかは分からないが、少なくとも自分が父親に期待されず、かわいがられていないことは敏感に感じていたはずである。「くず」とは、もちろん未来の天才言語学者ラスクのことであるが、ラスクは生まれたときはひ弱そうで、デンマーク語の決まり文句で言えば、「父親の木靴に入るほど小さかった」ので、ネルス・ハンスは失望した。そのため、彼は死んだマーアンとハンスに期待をかけ、ラスクをないがしろにしたのである。

一方、母親のビアテは、末っ子のラスクをかわいがった。その間の事情は、すでに触れたクナッティングウス宛のラスクの手紙に「私が幼いころ、父は私のことをグズで馬鹿だと思っていましたが、母は、妹が生まれてまもなく死んだために、末っ子の私をとてかわいがってくれました。私が10歳か11歳のとき、明らかに私より才能があった兄と姉が二人とも亡くなりました（筆者注：二人の死はすでに述べたように1796年5月のことだったので、正確にはラスクは8歳であった）。父は嘆き悲しみましたが、結局母は一人残った私

が教育を受けられるようにしてくれました。私の生き方を決めたのは、名誉を得たいという気持ちと母の願いでした。実際私は父からバイオリンの弾き方を少し教わっただけでした。少なくとも兄と姉が亡くなるまではそうでした。なにしろ、父は私には何も学ぶ能力がないと思っていましたから。」と書かれている。クナッティンギウスは、ラスクが1816-18年にストックホルムに滞在していたときに同じ屋根の下で暮らしていた聖職者・教育家で、ラスクより5歳年下のスウェーデン人であった。二人の間には何度かスウェーデン語での手紙のやり取りがあったが、ラスクからの手紙として残っているのは1通だけである。この中でラスクがかなり詳しい身の上話をしているということは、クナッティンギウスにそれほど心を許していたということであろう。

ラスクの父ネルス・ラスクは、正式な教育を受けたわけではなかったが、18歳で軍隊に入り、デンマークの政治・文化の中心であるコペンハーゲンで兵役についているときに、読み書き計算等の教養を身につけ、ある程度のドイツ語の読み書きもできるようになった。大変な読書家でもあり、歴史や地理を始めいろいろな分野の膨大な量の蔵書を持っていた。中でも数多くの医学書を所有しており、医者 of 真似事もしていたが、近隣ではklog mand(= wise man)「賢い男、物知り」と呼ばれていた。デンマーク語でklog mandは一般に「にせ医者」を意味するが、昔は正式な教育を受けた医者がいない地方では「教養を身につけた賢い人、物知り」が医者 of 代わりを務めることはよくあることだったのである。「にせ医者」の意味もそのような事情から生まれたのであろう（なお、後述するネルス・ラスクの3番目の妻アンネ・カトリーヌもその娘マーアーンもいっしょに生活するうちに医者 of 真似事を覚えたらしく、近隣ではklog kvinde(= wise woman)「賢い女」とよばれていた)。しかし、ネルス・ラスクの場合は、確かに「にせ医者」であっても、人の知らないことを知っている「物知り」として周囲の人に畏怖の念を持たれていたのである。周囲が畏怖の念を持つ理由はもうひとつあった。ネルス・ラスクはキュプリアーヌス(Cyprianus)と呼ばれる魔法の書物を秘匿しているとうわさされていたのである。キュプリアーヌスは、デンマークやノルウェーでは人々はその名前を耳にするだけでぞっとすると言われた書物で、その中にある呪文に

よって人の心を支配することができるという言い伝えがあった。キュプリアーヌスを隠し持っているのが、聖職者か「賢い男」だったのである。そのようなうわさが生まれたのも、ネルス・ラスクがそれだけ多くの蔵書を持っていたこと、周囲の人を驚かせる知識を持っていたことに起因していたのである。あるいは、ネルス・ラスクが本に自分の名前を書くときに、北欧では古くから魔術的意味合いが込められていたルーン文字を用いたのも、原因のひとつだったかもしれない。因みに、現代社会でもキュプリアーヌスは魔術に関わりがあることばとして生きており、デンマークのネット上にCyprianus-Netværk for Hekse i Danmark 「キュプリアーヌス——デンマークの魔女のためのネットワーク」というサイトがある。

そのような知識人であったネルス・ラスクが、一時は期待していなかったひとりだけ残った「くず」に期待をかけるようになったのは自然なことであった。ネルスは今やただ一人の子供となったラスムスに学校教育を受けさせようと思うようになったのである。彼はとりあえず読み・書き・計算を教えてみて、自分がこれまでラスムスをいかに不当に扱ってきたかを思い知ることになる。ラスムスは新しく教わったことをいとも簡単に理解し、その記憶力たるや驚異的であった。ラスムスはキリスト教の教理問答を完全に暗記し、生涯その長い一節を楽々と暗唱できたほどであった。ラスムスの賢さについての、ひとつのエピソードがある。あるとき、うわさを聞いた村の学校の教師がネルスを訪ねてきて、「お宅の息子さんを学校にやらないか。」ともちかけた。これに対して、ネルスは内心誇りに思いながら、「学校に行っても何か覚えることがあるのならやってもいい。」と答え、ラスムスに「何か本を取ってきて先生に読んで聞かせなさい。」と言った。言われたとおりに、ラスムスはドイツ語の本をもってきて読み上げてみせた。それを聞かされた教師は、「君は学校に来る必要はない。」と言ったと伝えられている。

ラスクはむしろ家で父親の蔵書を手当たり次第に読むことを好んだ。とくに歴史書が好きで、アーリル・ヴィトフェルト (Arild Huitfeldt) (1546-1609) によって編まれた『デンマーク王国年代記』(*Danmarks Riges Krønike*) (1596-1603) を読んだ。ヴィトフェルトは、クリスチャン4世に仕え、大法

官を務めたデンマークの貴族であった。歴史家ではないが、彼の書いたデンマークの歴史は、古代からクリスチャン3世の死（1559）までを記述したもので、18世紀に、作家でコペンハーゲン大学教授のルズヴィ・ホルベア（Ludvig Holberg）（1684-1754）の『デンマーク王国の歴史』（*Danmarks Riges Historie*）全2巻（1732-35）が出るまで、規範となるデンマーク史は他になかった。

またあるとき、ある教区牧師が、ラスクにラテン語と地理を教えてやろうと申し出たことがあった。ラスクは教えを受けるために、半年間教会に通うことになったが、後に「自分の人生で最も退屈で最も無益なことのひとつだった。」と述懐するほど、つまらない時間であった。ラスクはこの牧師のところに通うのがよほど嫌だったらしく、しばしばいろいろな理由をつけてさぼったようである。ときには仮病を使いすらしめた。母ビアテはラスクの気持ちがよく分かっている、病気が治ったらもっと好きな勉強させてやることを約束した。それを聞いてラスクはあわてて病氣から回復したのであった。そのころ、ネルスも妻の熱心さと息子かわいさに、ラスクにもっと勉強させようと思い始めていた。それで、教区司祭の面接を受けさせたところ、ラスクは見事に合格し、オーゼンセのラテン語学校で学ぶのに適していると判断された。絶対王政の時代にあった当時のデンマークには、貴族、聖職者、市民、農民という身分制度があり、また、当時のオーゼンセでは貧富の差も大きく、ラスクのように裕福ではない農民出身の子供が、上流階級の子弟が学ぶラテン語学校に行くというのは簡単なことではなかった。しかも、農家兼村の仕立て屋の収入では子供をオーゼンセの学校に入れ、その授業料と生活費を払えるわけもなかったが、ラスクは教区司祭や篤志家のおかげで奨学金を得ることができ、わずかながらも小遣いももらえることになった。

ラスクは、1801年の初め、ラテン語学校の当時の校長ルズヴィ・ハイベア（Ludvig Heiberg）（1760-1818）の面接試験を受け、4月に入学した。その時ラスクは13歳だった。後にラスク伝を書いた4歳年下のペーターセンはラスクの入学の8日前に入学していることから考えて、年齢的には遅い船出であった。ペーターセンには、その日のラスクの小柄な体躯、くるくると動く

目、机や長椅子に飛び乗ったり、飛び越したりする身軽さが印象に残っている。体が弱かったペーターセンにはラスクの元気さはうらやましかったのである。とくに同級生たちの目をひいたのは、きらきら輝くボタンのついた淡青色の上着とズボンという田舎くさいラスクのいでたちであった。ラスクは、当時のことを、前掲のクナッティンギウスに宛てた手紙でつぎのように書いている：「私が深い印象を受けたのは校長のL.ハイペア教授が丁寧で威厳のある態度で試験をしてくれたことでした。また、彼は、2年生でも十分やっていけるだろうが短期間一年生でラテン語を学んだ方がよかろうとも言いました。父も異論は唱えませんでした。私の最初の先生、後の法務官、トゥーネが個人的にラテン語の勉強をうまく手伝ってくれたので、4ヶ月ほどで正式の試験に優等で合格し、2年生になることができました」。ラスクは、ペーターセン始め、早い生徒よりは何歳か年長で入学したが、その間、他の子供達が学校に入って何年か後に読む本を、すでに独力で読んでいたことが早い進級につながったのである。クナッティンギウスへの手紙はさらに「でも、その短い間に私はもっと厳しい運命に見舞われたのです。つまり、私が心から愛した母は、ひいき目に見ていた私への思いが正しかったことを確かめる喜びを経験しないままに、確信と私の心から決して消されることのない励ましの気持ちとともに他界したのです。もっとも、母は私の新しい身分には幸せを感じ、満足していました。」と続く。つまり、「厳しい運命」とは、ラスクの将来を期待していた母ビアテが、8月に48歳の若さでなくなったことである。上流階級の子供たちが通うラテン語学校で学べるようになった一人息子の境遇を喜び、息子の才能と将来の可能性を信じつつ、母はこの世を去ったのである。後のラスクの業績を見れば、母の目は正しかったことが証明されたことは言うまでもない。このように、ラテン語学校に入学した1801年は、ラスクにとっては、希望と悲しみの交錯した年であった。

社会的には、当時のデンマークは、まだ都市型にはなっていなかった。1800年ごろのデンマークの人口は約100万人であったが、その80%は農村部に集中し、オーゼンセを含む地方都市に10%、首都コペンハーゲンに10%が住ん

でいるという状況であった。政治的には、デンマークは、大国間の争いに巻き込まれないように中立政策を取っていた。ナポレオン戦争（1799-1815）からも遠ざかり、ロシア、プロイセン、スウェーデンとともに武装中立同盟を結んでいたが、フランスの封じ込めをもくろむイギリスは、1801年4月2日、デンマークにネルソン提督率いる艦隊を送り込み、コペンハーゲン港での戦いが起こった。しかし、当時世界最強の海軍力を誇るイギリスに太刀打ちできるはずもなく、デンマークは即日武装中立政策を破棄し、イギリスの商船の入港を認めることになった。デンマークは、この1日限りの海戦で、370人の死者と665人の負傷者を出したものの、世界一の大国と戦ったという自負は、国民の間に戦勝気分にも似た高揚感とショナリズムを生み出した。この戦いを友人たちと見ていたロマン主義詩人で、ラスクもその作品を愛読したアダム・エーレンスレイヤー（Adam Oehlenschläger）（1779-1850）は、「戦いは4時に終わり、ネルソンは停戦を提案する交渉役を上陸させた。私たちはみんな喜んで、帰って聖木曜日のスープを飲んだ。」と当時を回顧している。以後、デンマークの人々は、北欧民族を意識し始め、デンマークの歴史、北欧の古きよき時代、北欧神話について語り始めたのである。ラスクが、ラテン語学校に入学したのは、コペンハーゲン港の戦い直後のナショナリズムの高揚期、ロマン主義運動が盛んになろうとしていた時期であった。

ラスクが入学したオーゼンセのラテン語学校は、中世以来紆余曲折を経た学校であった。まず、1283年に、聖クヌーズ教会（Skt.Knuds Kirke）と呼ばれた司教座聖堂にラテン語学校ができ、後に、聖母マリア教会（Vor Frue Kirke）と聖ハンス教会（Skt.Hans Kirke）にもそれぞれラテン語学校が併設された。宗教改革の後、1537年に、この3つのラテン語学校は併合されて1つになり、オーゼンセラテン語学校（Odense Latinskole）と呼ばれた。また、1621年には、これとは別に図書館を備えた現在の大学にも似たギュムネシオム（gymnasium）も開設された。そして、1802年には、教育制度の改革により、オーゼンセラテン語学校とギュムネシオムが合併されオーゼンセ大聖堂学校（Odense Katedralskole）と改名され、フーン島の学問・文化の中

心となったのである。このオーゼンセ大聖堂学校は今もその名を残し、他のギュムネーシオムと同様に、大学入学前の17歳～19歳の若者のための教育機関としての役目を果たしている。ラスクが入学したのは、合併直前のオーゼンセラテン語学校であった。オーゼンセラテン語学校には学生寮といったものはなく、遠くからやってきた生徒は学校の近所の個人の家に下宿することになっていた。ラスクは、卒業までに、靴屋宅、木靴職人宅、未亡人宅等、何箇所かの家に下宿しているが、最初に下宿したところはすでに触れた副校長のブロック宅であった。ブロックは、後述するようにギリシャ語学者でもあり、ラスクは学校での授業ばかりでなく私生活でもその影響を受けることになる。

ラスクはオーゼンセでの下宿生活の合間に頻繁にブレネキレの実家に帰っている。週末ばかりでなく、数キロしか離れていないこともあって、平日の放課後や授業開始前の早朝に、友達を連れて行くこともあったようである。裕福ではなく、実母がいなくなった家ではあるが、居心地がよかったのであろう。しかも、父ネルス・ラスクは、ラスクの母ビアテの死後数ヶ月で3度目の結婚をしていたにもかかわらずである。ネルス・ラスクは妻なしではいられない男であった。前述のようにネルスは医者者の真似事もしていたが、医者に見離された農家の女房の病気を治してやったことが縁で、貧しい家の娘を紹介され、3度目の妻アンネ・カトリーヌを娶っていたのである。ラスクとこの義母との相性はよかったようである。ラスクがオーゼンセに出て以来、実家でいっしょに暮らすことがなかったせいであったかもしれない。後にラスクは彼女のことを、すでに何度か触れたクナッティンギウス宛の手紙で、「私が知るかぎり最も尊敬に値し、最もすばらしい女性」と描写している。ラスクは実家との交流を絶やさず、父が死んでからは義母を自分の扶養家族と考えていたし、後には異母弟ハンスのめんどうもみた。しかし一方では、内心では自分の家や育ちのような過去のものには距離を置き、宗教や因習のような科学的ではないものを否定しようとしていた。学問に精進するために、そのような非科学的なものは無用であると考えていたからである。

当時のラテン語学校の教育は、旧態依然としたもので、宗教、ラテン語、

ギリシャ語、ヘブライ語が中心に教えられ、それも機械的な暗記を強いる教育であった。しかも、数学、歴史、地理などの時間はわずかしかなかった。母語のデンマーク語はもちろん現代語の授業はカリキュラムには存在しなかった。とくに、オーゼンセラテン語学校の場合は、1793年～97年には校長が不在で、その教育も停滞気味であった。ラスクは、最初の1年のラテン語文法の授業を「地獄」であったと述懐しているが、自由に好きなことを学びたいと願う若者にとっては、暗記中心の授業は退屈で魅力のないものであった。勉学の希望に燃えて入学したラスクは、オーゼンセラテン語学校の教育に失望させられたと同時に、裕福な家庭出身の子供たちの多い環境に慣れるのにも戸惑った。それが「地獄」という表現になったのである。

1797年に校長に任命されたのがラスクの面接をした、当時38歳の新進気鋭のハイバアである。そのようなとき、すなわち、ラスク入学の翌年、教育改革によって、オーゼンセラテン語学校がオーゼンセ大聖堂学校として再生することになったのである。このときの改革は、コペンハーゲンのメトロポリタンスクール (Metropolitanskolen) と呼ばれたラテン語学校 (この名称は現在も引き継がれている)、および当時デンマークの支配下にあった、ノルウェーのクリスチャニア (つまり現在のオスロ) とオーゼンセのラテン語学校の3校で行われた。これはオーゼンセが重要都市であったことを示しているが、名実ともにコペンハーゲンに次ぐデンマーク第2の都市であった。水路が引かれ、交通の便が発達し、経済活動が活発化し、コペンハーゲンのように大火に見舞われることのなかったオーゼンセが、整った近代都市として正に脱皮しようとしていた時期でもあった。

オーゼンセ大聖堂学校の改革は徹底的であった。校長には引き続きハイバアが任命され、改革の急先鋒となった。彼は、教師たちに厳しいしつけを奨励したが、体罰は禁じた。むしろ、納得するまで言い聞かせる、厳しくしかる、場合によっては娯楽施設を使わせない等の方法を薦めた。それまでの教師のうち、ブロックとトマス・トロイエル (Thomas Trojel) (1774-1839) 以外はすべて任を解かれ、新しく7名の十分な教育を受けた優秀な教師が任命された。教員の上に、教員を指導する上級教員を置いて連携を図り、生徒

を習熟度によるクラスに分けた。学力不足の生徒は予備学級で再教育されることになった。結局、残った生徒は38名であった。選ばれた者だけが残ったのである。そのエリートの38名の生徒が、校長を含め10名のエリート教員の指導を受けることになったのである。授業は、日曜日を除く週6日制で、朝8時から夕方5時まで行われた。クラスは2年コースで4段階に分けられ、ラスクはその下から2番目のクラスに編入された。ラスクにとって、ラテン語学校の1年は暗記ばかりを強要される教育のために正に地獄であったが、大聖堂学校になってからは、厳しいが充実した教育のおかげで、学問の基礎を培うには実に恵まれた環境であったと言える。暗記を強要される教育ではなく、自分の頭で考える勉強を望んでいたラスクにとっては、喜ばしい学校改革だったのである。カリキュラムには、従来どおり古典語のラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語はあったが、現代語としてドイツ語、フランス語、デンマーク語（ただし、英語はなかった）が加わり、宗教、歴史、地理、数学の他、人類学、哲学史、博物学、物理学等の科目が充実した。新しく任命された教員の優秀さは、その後の15年で5人がどこかの校長になっていることから知られる。また、後に1人がコペンハーゲン大学の教授となり、2人が教授の称号を得ている。新設時のオーゼンセ大聖堂学校は、いわば、意欲に燃えた新進気鋭のエリート教師の集団体制による教育組織だったのである。

ラスクは、オーゼンセに出て2年目から、そのような厳しいが意欲と活気の溢れる教育環境で勉学に励むことになったが、実際にはどのような生活をしていたのであろうか。子供のころのラスクは、その優れた記憶力に頼って暗記中心の勉強をしていた（小さいころに覚えた教理問答を大人になっても復唱できたことはすでに述べた）が、オーゼンセでは、自分の好きなテーマについて自分の頭で考える勉強法に切り替えた。知識を受け入れるだけでなく、同時に批判能力も身につけていった。対象を分析し、その中に存在するシステムや構造を看破する知力を身につけていった。ラスクは、ひたすら憑かれたように勉強した。連日夜遅くまで勉強した。校長のハイベアによれば、夜中の1時、2時まで勉強し、朝は5時、6時に起きて机に向かったという。ラ

ラスクが一時下宿していた靴屋の向かいが校長のハイベアの家であったために、部屋の明かりでその様子が分かったのであろう。学校を欠席することはなく、十分な予習をし、授業は集中して受け、内容はその場で完全に理解し、提出する宿題も完璧であった。毎日、授業で習ったことをノートに整理し、自分で読んだ書物からの情報を付け加え、自分の考えを書き込んだ。

ラスクの非の打ち所のない授業態度や優秀な成績は、当然教師たちの賞賛を浴びることになったが、心配する向きもあった。ハイベアは、あまり皆が誉めることは、本人のためにならないのではないかと心配した。しかし、その心配は杞憂に終わった。どんなに誉められようとも、ラスクはひたすら勉学に打ち込んだのである。副校長のブロックは、そのようなラスクの態度を、自己不信、劣等感からくるものではないかと心配するほどであった。ラスクの関心があまりにも多岐にわたることに、ハイベアは、ひとつのことに集中する根気が欠けているのではないかと心配をしたが、やれば何でもできてしまうので、いろいろな対象に対して自分の力を試したいのだろうと思い直した。一時の暇をも惜しむようにひたむきに勉学に打ち込む姿は、落ち着きなく焦っているようにも見えた。実家に戻ったときも、ほとんどの時間を本を片手に部屋の中をぐるぐる歩き回った。オーゼンセ時代のラスクは授業以外の実に多くのことに興味を引かれた。言語の習得に関しては、カリキュラムに組み込まれたヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、デンマーク語の他、まず第一に後述するアイスランド語に熱中し、さらにドイツ語の方言、フューン島の方言、英語、古英語、ゴート語、フェーロー語、グリーンランド語、クレオール語、マレー・ポリネシア語の習得にも精を出したのである。しかし、ハイベアの懸念は正しかった。ひとつの対象にエネルギーを集中することと、つぎつぎと異なった対象にエネルギーを分散していくことは、両立し得ない。ラスクの宿命的な弱さはそこにあるような気がする。複数の対象に対して同時にエネルギーを分散させることは、知力の許容量への挑戦、勤勉さの限界への挑戦につながる。その結果、ラスクの中に、精神的、肉体的疲労が蓄積していったのではないかと思われる。

ラスクはしだいに学校の勉強はすばやく終わらせ、自由時間を捻出し、自

分の好きな勉強に打ち込むようになっていった。このようなラスクの態度に、教師たちは一時危惧の念を抱いた。他の生徒たちへの悪影響を懸念したからである。周りの心配をよそに、ラスクはマイペースで興味の赴くままに書を漁り、真実を追い求めた。ラスクはいつの間にか、人生の目的を「真理の探究」に置くようになっていた。そのようなとき、ラスクに蔵書を使わせてくれる人物が現われた。それはグスタウ・ルズヴィ・バーゼン (Gustav Ludvig Baden) (1764-1844) という市井の歴史家であった。バーゼンは若いころは歴史学者になることを夢見たが、扶養しなければならない家族のために学問の道をあきらめ、法律を学び判事になったという経歴の持ち主であった。後に公金横領のかどで投獄されるが、刑期を終えるとデンマーク史の執筆に専念し、家族の支えの下で『デンマーク王国の歴史』(*Danmarks Riges Historie*) 全5巻 (1829-32) を上梓した。彼は鋭い筆鋒と下手な人付き合いのために通世生活を送っていたが、なぜか向学心に富むラスクのことを気に入り、自分の蔵書を解放したのである。ラスクが北欧の歴史に興味を引かれ、知識を深めたのは、このバーゼンの影響によるところが大きい。短気で人間嫌いのバーゼンであったが、ラスクは生涯彼との付き合いをやめなかった。

そして、ラスクの北欧の歴史に対する興味が、北欧の古い言語、古アイスランド語、すなわち、古ノルド語の興味につながることは自然なことであった。ラスクが、いつ頃古アイスランド語に興味を持つようになったのかは、はっきりとは分からないが、おそらく1803年の終わりごろかその翌年の初め頃ではないかと思われる。ラスクに『ヘイムスクリングラ』(*Heimskringla*) とそこで用いられた古アイスランド語の存在を教えたのは、オーゼンセ大聖堂学校のドイツ語・フランス語教師ヨークム・エヴァンス・スーア (Jochum Evans Suhr) (1779-1859) であったが、彼が学校の記録簿にラスクが北欧のサガとそれが書かれた古アイスランド語を学んでいるというコメントを初めて記したのが1804年2月29日のことだったからである。スーアは「彼(=ラスク)は、自由時間に北欧の古いサガ、とくに古ノルド語の勉強に一生懸命である。例えば、彼は私からシェーニングのスノッリ・ストウルルソンを借り、古アイスランド語に親しみ、言語の類似性を探り、語源を調べるまっ

たくすばらしい鑑識眼を示したりしている。」とラスクがアイスランド語に取り組んでいた姿勢に触れている。『ヘイムスクリングラ』は文字どおりには「世界の環」を意味し、13世紀に、アイスランド人のスノッリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson) によって書かれたと言われている。その内容は、サブタイトルに「ノルウェーの諸王のサガ」とあるように、ノルウェーの諸王列伝である。ラスクは『ヘイムスクリングラ』によって、アイスランド語の魅力に取り付かれ、古い北欧文化への興味を深めたのである。

『ヘイムスクリングラ』をスーアから借りたラスクは、古アイスランド語の知識も古アイスランド語の辞書もなく、それを読もうと試みた。古アイスランド語は、現代アイスランド語もそうだが、保守的な言語で、古いゲルマン語の特徴である屈折語としての特徴を色濃く残している。つまり、古アイスランド語の動詞は、人称、数、法、時制、態によって複雑に変化し、名詞・形容詞も、性・数・格に応じて変化をした。ラスクは、変化形が出てくるたびにそれを書きとめ、できるかぎりすべての変化形を記録していった。とくに、北欧語では定冠詞は名詞の語尾のように後置され1語として綴られる(例えば、英語のthe kingに対して北欧語ではkingtheのように、名詞の語尾に定冠詞が貼り付けられた語形をとる)ので、名詞の変化の場合には、(1)定冠詞がつかない場合と(2)語尾に定冠詞のついた場合の2種類の変化形を示した。例えば、konungr[コヌングル]「王」(男性名詞)の変化形を示せば、以下ようになる：

(1) 定冠詞がつかない場合

	単数		複数	
主格	konungr	王が	konungar	王たちが
対格	konung	王を	konunga	王たちを
与格	konungi	王に	konungum	王たちに
属格	konungs	王の	konunga	王たちの

(2) 定冠詞がつく場合

	単数		複数	
主格	konungrinn	その王が	konungarnir	その王たちが
対格	konunginn	その王を	konungana	その王たちを
与格	konunginum	その王に	konungunum	その王たちに
属格	konungsins	その王の	konunganna	その王たちの

つまり、それぞれの単語について、これらの語形が登場するたびにひとつひとつ記録して、変化表の全体像を作り上げていったのである。そのような努力が名著『アイスランドあるいは古ノルド語入門』の礎となったことは言うまでもない。

なお、オーゼンセ大聖堂学校では、毎年試験の後で、優秀な生徒に褒美として本を与え、全生徒の前で表彰する習慣があった。当然ラスクは何度か表彰される榮譽を得、ドイツ語版の世界史やホメーロスの叙事詩のドイツ語訳等をもらったことがあったが、1804年の11月29日には当時出版されたばかりのノルウェー人歴史学者ゲアハート・シェーニング (Gerhard Schöning) (1722-80) によるデンマーク語訳『 Heimskringla 』(全3巻) を贈られている。教師たちが、ラスクの古アイスランド語への関心や『 Heimskringla 』をスーアから借りていた事実を知っていたからである。褒美として与える書籍の選定については、スーアから事情を聞いていた歴史・地理の教師トロイエルが強く推奨した。このことが、ラスクの古アイスランド語と古い北欧文化への傾倒に拍車をかけたのは当然であった。

ラスクは、アイスランド語を徹底的に研究した。アイスランド語の辞書がないのなら、自分で作ればいいと考えた。デンマーク語の辞書のそれぞれのページの間に白紙を差し込んで、その白紙にデンマーク語の見出し語に該当するアイスランド語の単語を書き込み、新しい情報 (例えば、名詞の性、数、格等) が判明するたびにその内容を少しずつ充実させていった。そのようにしてでき上がったアイスランド語の辞書は、かなり厚い八つ折り版2巻本にな

った。ペーターセンは、そのラスク伝の中で、この辞書の見出し語の実例を2つ挙げているが、ここではそのうちのひとつ、dǫð「行為」を引用する。若干敷衍しながら日本語に直せば以下ようになる（なお、ドイツ語の綴りは現在の正字法に従った）：

Dǫð. 女性名詞。複数形dǫðir. (スウェーデン語dåd「行為」、オランダ語daad「行為」、英語deed「行為」、ドイツ語tat「行為」、古英語dæd「行為」) 行為 (デンマーク語dåd). (サクソン語やドイツ語には見られるが、北欧語には存在しない動詞 (オランダ語doen「する」、英語do「する」、ドイツ語tun「する」、ゴート語taujan「する」) から、多くの語と同様、動詞にdを付けて派生する過去分詞から造られたと思われる。また、ドイツ語tun-tat (過去形)-getan (過去分詞形)、オランダ語doen-deed (過去形)-gedaan (過去分詞形) と同じように、この語には母音変化が起こる。因みに、この語の名残りとして、別に現在分詞から派生したdándimaðr「有為の男、熟達した男」がある。これら2語のdoenに対する関係は、ちょうどfæð「冷淡さ」とfiandmaðr「敵」のfia「憎む」に対する関係、frygð「愛」とfrændi「友、親戚」のfrfa「愛する」に対する関係と同じである。

ここでは、アイスランド語と他のゲルマン語との対応関係を示した上で、名詞dǫð「行為」は、ドイツ語のtun「為す、する」や英語のdo「する」のように他のゲルマン語には存在するが、北欧語には存在しない「する」という意味の動詞の過去分詞から派生したと思われること、動詞が過去・過去分詞と変化する際に起こる母音変化と同じ母音変化を経ていること、アイスランド語には同語源の「する」、dǫð、dándimaðrと類似の関係を持つ語群があることが示されている。すなわち、この時代にはまだ明確な概念がなかったゲルマン語内の同系語の対応関係、ゲルマン語の特徴のひとつである母音交替の事実（例えば、英語のsing-sang-song;songのように、動詞の活用の際に母音に変化をし、関連する名詞も母音に変化が起きていること）、同語源の語

の派生関係という現在のゲルマン語の比較言語学に通じる問題を的確に提示しているのである。これがまだ専門的な大学教育を受ける前の16、7歳の少年の仕事だと思えば驚きも新たになる。しばらくすると、ラスクが作成した辞書は、生徒間で書写されて流布し、しばしば授業の内容を修正したり、新しい情報源となったりするようになった。あるとき、ラスクの友人が、授業中にアイスランド語に関する意見を発表したことがあった。それを聞いて驚いた先生が「君はどこでそれを知ったのかね。」と尋ねた。するとその生徒は「ラスクのアイスランド語の辞書に載っていました。」と答え、クラスにいつもの笑いが起こったと、ペーターセンは記している。

ラスクのオーゼンセにおける他の生徒たちとの人間関係はどうだったのであろうか。ペーターセンは、上級生の中でラスクに最も大きな影響を与えたのは、ハンス・ヤコブ・ハンセン (Hans Jakob Hansen) (1786-1850) だったと言う。ハンセンはラスクがオーゼンセラテン語学校に入学した翌年には卒業しているので、学校でいっしょだったのは1年間だけだが、その付き合いはラスクが死ぬまで続いた。ハンセンの出身がラスクが生まれた村に近かったことと一時期同じ屋根の下で生活したことが、親しみを抱ききっかけとなったようである。彼は大学では数学を専攻した後教職につき、最後にはラテン語学校の校長になっている。イェルムスレウとビエロムが編集したラスクの手簡集の最初に収録されているのが、1805年にコペンハーゲンにいるハンセンに宛てたと思われる手紙の草稿である。内容は、大学で数学を専攻しているハンセンが、数学を学ぶ喜びとすばらしさを語り、歴史をやめて数学を志すようにと諭した手紙に対するラスクの返信であるが、歴史は単なる暗記の学問ではなく、言語学、政治学、法学等多くの学問の基礎となる重要な学問だという反論をしたものである。ラスクが当時すでに歴史に強い関心をもっていたことが知られる。

また、ペーターセンが引用している1805年3月27日のハンセン宛の手紙で、ラスクは、勤勉賞として『 Heimskringla 』をもらえることになったこと、ハンセンの予言どおり北欧の歴史を研究していること、そのためにはア

イスランド語が不可欠だが、アイスランド語を学ぶための教材も文法も辞書もないことを述べた上で、アイスランド語の辞書を手に入れてほしいと依頼している。当時のオーゼンセでは手に入らない本の入手を頼むほど親しい先輩であったということであろう。さらに、ラスクは、同年6月のハンセン宛の手紙で、「生きているかぎり、この言語（＝アイスランド語）を知っていること、その文献の中で祖先たちがどのようにして試練に耐え、決然とそれを克服したかを知ることは、私の慰め、喜びとなるでしょう。…お分かりのように、まずあなた以上に驚いたのは、私たちの祖先が非常に優れた言語を持ち得たということです。科学はずっと進歩しているように思われるのに、（今日では）私たちはずいぶん劣った言語を持っているのです。」と、アイスランド語に対する熱い気持ちを吐露している。事実、ラスクは、死ぬまで、片時もアイスランド語の研究を中断することはなかった。文面からも分かるように、ラスクは、元来、北欧の歴史を学ぼうとし、古い文献を読むためにアイスランド語の必要性を感じた。つまり、始めはアイスランド語は歴史を学ぶための手段であったが、いつの間にか主客が転倒したのである。レニングはこのことについて「しかし、歴史はドアにすぎなくなった。彼はドアから入ったのだが、その先に本来の家があった。それが言語の世界であった。」と述べている。

そのつぎにラスクが親しくなったのが、たまたま副校長ブロック宅でルームメイトになったヨアキム・ゴスケ・クローズ (Joachim Godske Clod) (1788-1850) であった。彼らは何年間も、勉学をともにし、夏には夜通し自然の中を逍遥し、しばしばラスクの実家をいっしょに訪ねた。入学して1年が経ったころ、連れだって散歩をしていたラスクがクローズに宗教的真理についてどう思うかという質問をしたことがあった。このことに関してクローズは後に「この質問は青天の霹靂でした。これまで教科書の宿題をやってきて、できないのではないかという怖れ、終わったという喜び、終わらないのではないかという心配以外は、この問題について考えたこともなかったからです。」と語っている。ラスクは機械的に暗記することによって教えられるキリスト教の教義に早くから疑問を持っていたのである。後にはペーターセン

も二人に加わって、心の底で考えていることや感じていることを腹藏なく伝え合う友人になったのである。また、ラスクは自分の考えを人に伝えずにはいられない性格だったので、アイスランド語に熱中して得た知識を周りに教えようとした。クローズが聞き役で、いわばラスクの弟子第一号になったのである。そして二番目の弟子が自分であったとペーターセンは述懐している。クローズは、後にラテン語学校の教師になった人物だが、生涯ラスクの言い分に耳を傾ける役を務めた人物であった。晩年ラスクのもとを去っていった友人の多い中であって、最後まで心を許せる友人であった。ラスクは、遺言によってクローズの子供に養育費を残したことでそれが分かる。

ラスクは勉学に関しては同級生の中で一目置かれる存在であった。日曜日には、仲のよい志を同じくする友人たちと集まりを持って、勉強会を開いたり、夢を語り合ったりした。ラスクは、とくに昔の北欧について熱弁をふるった。ペーターセンが、『 Heimskringla 』のデンマーク語訳を読んでいると、原語のアイスランド語で読まなければいけないとラスクに注意されたのもこのころである。最も古い北欧語の資料としての石碑や金属に刻まれたルーン文字も学んだ。古い時代の北欧について語り合うことによって、ラスクやペーターセンたちは、若者らしく祖国デンマークに対する思い入れを強くしていった。また、ラスクは、奨学金と篤志家の援助で暮らしていたので、近隣のさまざまな家庭に招かれて昼食をご馳走になり、帰りに夕食用のスマェブレズ (smørrebrød) (スライスしバターを塗ったパンの上いろいろな食材を載せて食べるデンマーク特有のオープンサンドイッチ) を作ってもらっていた。友人たちとお互いの実家を訪ね合ったりすることもあった。ラスクが友人たちをブレネキレの実家に招いていたことはすでに述べたが、逆にクローズの実家、ペーターセンの養父母の家、他の友人宅へ招かれることもあった。そのようなとき、オーゼンセの人々はラスクのことを指して、「さあ小さな教授がやって来たよ。」と言った。それほど、ラスクの勉学の意欲と優秀性が周りに知られていたばかりでなく、彼の議論好きも有名だったのである。

夢をみるのは若者の特権である。ラスクやペーターセンたちは、ニュージ

ーランドにヨーロッパの植民地を建設し、それをさらにオーストラリアに拡大しようと語り合った。しかも公用語をアイスランド語にしようと計画していたのは、アイスランド語信奉者のラスクラしい思いつきである。キャプテン・クックがニュージーランドの海岸地帯を探検しマオリ族と接触したのが18世紀の中ごろで、当時はニュージーランドとオーストラリアにイギリス人の入植が本格化しようとしていたころであった。英語の必要性を感じたラスクが、ドイツ語・フランス語教師スーアの下で、カリキュラムにはない英語の個人レッスンを受けたのはちょうどこのときである。さらに、ニュージーランドやオーストラリアに近い島々の言語として、マレー・ポリネシア語を学んだのも理想郷建設という夢の実現のためであった。

また、若者たちは、当時のデンマークの王侯貴族や上流階級・知識階級の多くの人々が会員になっていたフリーメイソンにも興味を引かれた。なお、デンマークの歴代国王の何人かはフリーメイソンに加盟していたが、後にラスクの学問的成果に期待し、留学資金の提供に同意した国王フレゼリク6世(Frederik VI) (在位期間：1808-39) もフリーメイソンであることは公然の秘密であった(ラスクによる『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』の冒頭の献辞「国王に捧ぐ」(Til Kongen)にある国王とはフレゼリク6世のことである)。フリーメイソンがドイツを経由してデンマークに入ってきたのは18世紀の中ごろであったが、フランスから導入された啓蒙主義と結びついて、流行の兆しを見せていたのである。知的欲求が旺盛であった若者たちが、熱に浮かされたようにフリーメイソンに関する書物をむさぼり読んだのは自然なことであった。しかし、夢や熱はいつかは覚めるものである。若者たちの植民地建設の夢やフリーメイソンの熱もいつしか冷めたのは言うまでもない。確かなことは、ラスクが宗教や神秘主義を否定して科学的な方法で真理を追及しようとしていたことで、彼が理性を重視する啓蒙思想と結びついたフリーメイソンに興味を引かれたとしても不思議ではない。

後年、長期のインド旅行の途中、ラスクは現在のスリランカの都市コロンプでフリーメイソンの会員になったが、その芽生えは若き日のオーゼンセ時代にあったのである。このことについては、ペーターセンは、ラスク伝の中

で、1821年の11月22日に船上で34歳の誕生日を迎え、30日にコロンボに着いたという記述に続いて、「翌年3月30日までのコロンボ滞在の間に、彼（＝ラスク）は当地の文学協会の名誉会員になった。…レイヤード氏やリチャード・オトレイ氏の他、メソディストの伝道師クラフ氏の手助けもあって、彼は何人かのインド人の学者と知り合いになり、しゅろの葉にパーリ語とシンハラ語で書かれた写本という稀有な宝物を集めた。彼が語る当地の人々の中に、オランダ人のシュナイダー大尉の名前もある。彼はフリーメイソンになった。悪化する病気のために帰国を決心することになり、英国船コロンボ号で、先に述べたように3月30日にコロンボを出航した。」と記しているのみである。ラスクはここに登場する人物たちの誰かの紹介でフリーメイソンに加盟したのであろうか。あるいは、病状の悪化故の帰国とフリーメイソンと何かの関連性はあるのだろうか。この頃のラスクの日記には、連日のようにクラフやシュナイダーの名前が登場するが、フリーメイソンに関する明確な記述はなく、ペーターセンがこれ以上この問題に触れていないため、「彼はフリーメイソンになった。」という短い一文と、前後の文との関係は不明である。ラスクとフリーメイソンとの関係は、当時の彼の心理状態を知る上で重要だが、現在のところ解明の糸口はない。新しい資料の発掘が期待される。

オーゼンセラテン語学校の教師は優秀な人材の集まりだったことはすでに述べたが、彼らはどのような科目を教え、ラスクのことをどのように見ていたのであろうか。まず、校長のハイベアの専門はラテン語で、ラスクもその指導を受けている。ハイベアは1797年から死ぬまでオーゼンセラテン語学校・大聖堂学校の校長を務め、後に教授の称号を得ている。なお、当時のデンマークでは、大学で講義を担当する正式の教授の他に、学問的に優秀な業績を残した者に与えられる「称号としての教授」が存在した。前述したフッスィングの「ラスキアーナ」によれば、ハイベアは1803年4月9日の記録簿に「非常に優れた頭脳、現在の在籍者中で最も優れた頭脳の持ち主。年は若いが一見かけよりは年上なのだが——すでに非常に鋭い洞察力、非常にすばらしい判断力、非常に正確な表現力を示している。すばらしい記憶力を持って

いる。…生活態度は賞賛に値する。行動は節度があり、礼儀正しく、温和である。性格は粗暴になることなく常に快活であるが、やるべきことは真剣に注意深く行う。端的に言えば、稀有な若者。」と記している。

副校長のブロックは、教育家であると同時にギリシャ語文法も執筆している言語学者でもあり、オーゼンセではギリシャ語とラテン語を教えていた。ラスクはブロックの下でギリシャ語、ラテン語、デンマーク語を学んだ。ブロックは、後に別のラテン語学校の校長となり、教授の称号も得ている。彼は、言語の比較・分類とデンマーク語の正字法の両方で、ラスクの言語観に強い影響を与えた人物として重要である。ディザリクセンは前掲書『ラスムス・ラスクと文法的伝統』において、ギリシャ語やデンマーク語ばかりでなく、ラスクのアイスランド語の文法もブロックのギリシャ語文法が基本にあることを指摘している。ブロックは、1805年に『デンマーク語正字法の基本的特徴』(*Grundtræk til en dansk Retskrivningslære*)を出版しているが、これを読んだラスクは、尊敬するブロックを初めて批判することになる。ブロックが示した正字法のルールには、例えば、長母音を表わすために文字をダブルさせる1音節のsteen[ステーン]「石」やlyys[リュース]「光」と2音節から成る skeen[スケーエン]「スプーン」(語尾の-enは定冠詞で、ske-enと分けられる)やuundværdig[ウウンヴェアディ]「欠くことのできない」(語頭のu-は否定を表わす接頭辞で、u-undværdigと分けられる)の文字のダブリとの矛盾等、ルールの設定に一貫性がないことを批判したのである。このラスクの批判に対するブロックの対応は包容力に富むものであり、1805年の記録簿に「彼の洞察力と、対象を看破し、自分の視点から観察して誤りを発見する彼の能力の非常に際立った証拠を、私は今学期に見た。授業中に必要な注意力が彼に欠如しているとは思われない。彼は、他の多くの生徒のように、教師の言うことをそれ以上調べもせずには呑み込むことはない。彼は常に私に対してすばらしい、十分な根拠のある、しかもしばしば鋭い意見や異論を表明する。」と記されている。なお、「授業中に必要な注意力が欠如しているとは思われない。」とは、さまざまなことに興味を引かれ、自分の好きな勉強に時間を費やすラスクが、授業中に注意散漫になりはしないかという教師たちの懸

念を否定したものである。ブロックのコメントが象徴するように、ラスクはオーゼンセ大聖堂学校では押さえつけられることなく自由に自分の意見を表明できた。当時のラスクは批判が周囲に引き起こす波紋を知らずに済む恵まれた環境にいたと言えるが、後年他者を批判することによって自分の生きる世界を狭めていったラスクにとって、それが真にふさわしい環境であったかには疑問が残る。

ブロックの正字法の著書についての批判は、ラスクが生涯持ち続けたデンマーク語正字法の改革問題の発端となった。以後、ラスクは1音1文字の原則の上に立つ正字法の確立を目指すことになる。ラスクは、まずその実践として、それまで[k]という音にはkや2文字のchが用いられていたのに対して、常にkという1文字のみを当て、自分の姓名の綴りを元来のRasmus Christian RaschからRasmus Kristian Raskに変更すると宣言したのである。このときラスクは若干17歳であった。なお、ラスクが非科学的なものの代表として、宗教すなわちキリスト教を否定しようとしていたことはすでに述べたが、最終的にはキリスト教徒を意味する名前Kristianさえ削除してしまった。Rasmus Raskという姓名と綴りはそのような過程を経て生まれたのである。

また、トロイエルは、歴史と地理の担当で、後に別のラテン語学校の校長になっているが、ラスクがデンマークや北欧の歴史に関する本を読んでいたことに言及している。新任の教師の中で、とくにラスクに影響を与えたのは前述のスーアである。彼はオーゼンセ大聖堂学校で新しく設けられたフランス語とドイツ語の担当教員として迎えられた。彼もまた後に別のラテン語学校の校長になっているが、当時は二十歳を出て間もない新進気鋭の教師であった。フッスィングによれば、スーアがラスクについてのコメントを学校の記録簿に初めて書いたのは、1802年11月31日のことで、「他のすべての点と同様、勤勉さにおいても、ラスクは愛すべき生徒の見本と見なすことができる。…彼はいつも毎日の授業の予習を完璧に行い、自由時間を賞賛すべき方法で利用し、自分の知識の範囲を広げるためのどんな機会も逃がさないことは、私だけでなくすべての教員が知っていることである。また、生活態度も申し分がない。彼は、節度ある無邪気な快活さを示すが、羽目をはずして粗

暴になることはない。」と、ラスクの模範生ぶりと明るい性格とが描かれている。つぎのコメントは同年12月23日のもので、「彼は、絶え間ざる注意深さととくに賞賛すべき集中力で授業に出席し、判断し選択した上で、誤ったりおかしいと思うことのすべてを書いて表現することができる。…彼の提出物は正しい鑑識眼と判断力を示している。…同世代の者よりはるかに優れた洞察力を示す彼の答えに驚かされることはまれではない。」と、ラスクの熱心な授業態度と優れた鑑識眼、判断力、洞察力が賞賛されている。翌1803年になると、スーアは、3月31日に、「まったくすばらしい能力を、天はこの生徒に与えている。彼は、獲得した知識を非常にうまく応用し、役立てることによって、すばやく理解し、正しく判断し、すばらしい鑑識眼を示す。そして、これらすべては最終的には正確な記憶力に起因する。…彼はすでに学問に真の興味を抱いている。彼がいずれ最も価値ある学問の開拓者のひとりになることは確かであろう。」と、ラスクの天与の才能、記憶力のすばらしさを絶賛し、学者としての可能性を示唆している。15歳の少年の将来の可能性をこのように予言し、見事に的中させた教師の鑑識眼こそ称賛されるべきかもしれない。

さらに、スーアは、1804年1月31日の記録簿に、「彼は、誤ることなくドイツ語を読んで理解することができる。フランス語も、完璧とはいかないが、かなりよくできる。彼は作文で間違いを犯すことがますますまれになっている。彼が急いで書こうとしなければ、間違いはなくなるだろう。」と、ドイツ語とフランス語の習熟度に言及している。その後のラスクのフランス語との係わりについて、スーアは、1805年の2月28日に「ラスクは私からフランス語の本を借りている。彼に関するかぎり、これが勤勉なふりをするためのものでないことは、誰もが確信できる。…私の科目では、あと1年間勉強を続ければ、彼の習熟度は大学で学ぶのに適格となるであろう。」と記している。おそらくラスクは何冊ものフランス語で書かれた本をスーアから借りたのであろう。スーアは、ラスクの行為が教師に勤勉さを売り込むためのものではなく、フランス語の実力が向上してきた結果であることを示唆し、このままあと1年間勉強すれば、彼の教えるドイツ語とフランス語については、大学進

学の資格が整うだろうという確信を述べているのである。スーアは、さらなるラスクの余力と熱意を信じて、当時はまだ重要性が認められていなかったために正式のカリキュラムにはなかった英語を個人的に指導している。それにしても、15歳の子供に、母語のデンマーク語の他、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語、フランス語を学ばせ、その上に英語、アイスランド語にまで興味を起こさせたオーゼンセ大聖堂学校には、畏怖の念すら抱かざるを得ない。

その他の教師のコメントも同様の趣旨のものが多い。数学と物理を教えた上級教員カール・フェルディナン・ダイエン (Carl Ferdinand Degen) (1766 - 1825) は「ラスクは、思慮、機智、洞察力、すでに獲得した知識を応用する実用的才能、自分の力でさらに多くを発見する、少なくとも既知の真実にいたる新しい道を行く「発見的天才」を持っている。つまり、ラスクは稀有な天与の才能を持った若者である。」と述べている。具体的には、ダイエンは、数学の授業でラスクともう一人の生徒（後に公認会計士になった）は、非常に優秀なので他の生徒といっしょの基礎的な必修の授業を免除して、個人的に指導した方がいいという提案をしている。この提案は教育委員会でも議論され、数学の授業を別枠で設ければやってもよいということになったが、そこまでは踏み込まず、結局この話は立ち消えになった。なお、ダイエンは、後に別のラテン語学校の校長となり、1814年からはコペンハーゲン大学の数学教授になっている。また、宗教を教えたウルリク・アンドレアス・ローデ (Ulrich Andreas Rohde) (1765 - 1816) は「この生徒の中では、きらきら輝く機智、すばらしい洞察力、深い思慮、非常に豊かで非常に正確な記憶力等の尋常でない諸才能が統合されている。…彼の行動には、快活さ、思慮、節度、気高い感情等のすばらしい融合が、節度ある無邪気さに色づけられて、示されている。」と記している。なお、ローデも後に別のラテン語学校の校長に任命されている。

このような理解あるエリート教師団に恵まれ、勉学の意欲も十分に満たされる環境の中で、勤勉且つ自由に学んだラスクは、教師たちの評価が高く、

他の生徒たちより進級も早かった。前掲のラスクがクナッティンギウスに宛てた手紙では、始めは短期間1年生としてラテン語を学び、すぐに2年生になったことになっているが、ペーターセンの遺稿によれば、当時は2年生が最も下だった（その担任が手紙に出てくるトゥーネ（Thune）であった）ようで、もしそうだとすればラスクは2年生として入学し、すぐに3年生に進級したことになる。しかも、学校制度が変わるときにはすでに4年生になっていた。1802年にオーゼンセ大聖堂学校が生まれたとき、ラスクは4段階あるクラス（それぞれのクラスは2年コースになっていたことはすでに述べた）の上から3番目のクラスに編入された。その際、ラスクは最上級クラスと2番目のクラスの生徒しかもらえない奨学金を特別に与えられている。奨学金と篤志家の援助がなければ学校を続けられないラスクではあったが、学業の優秀さがなければあり得ない特別待遇であった。そして1803年には、同じクラスの多くの年長の生徒に先んじて上から2番目のクラスに飛び級し、1804年の10月には1年半で最上級クラスに進級した。ラスクにとっては、オーゼンセ大聖堂学校での生活は、経済的な心配もなく、教師の庇護の下で自由に勉強し、生涯の友も得ることができた極めて恵まれたものであった。彼の人生で、最も無風で、最も幸せな時代であった。

以上のように、ラスクは、年齢とは関係なく生徒の能力に応じて飛び級させるエリート教育のシステムに乗って順調に進級していったことになるが、彼は2年間でいいはずのこの最上級クラスに3年間在籍することになる。ラスクが、オーゼンセ大聖堂学校を卒業したのが1807年の10月で、彼がもうじき二十歳になろうとするときだったからである。4歳年下で、ラテン語学校に同時に入ったペーターセンも翌年に大学入学を許可されているので、ラスクの大学入学は年齢的には決して早くはなかった。ラスクは能力的には大学で学ぶための十分な準備がすでにできていたのだが、コペンハーゲンで生活する経済的問題が大学志願を遅らせたためであった。デンマークで2番目に古いオーフス大学がユトランド半島に設立されたのは1928年のことであり、1964年設立のオーゼンセ大学（現在の南デンマーク大学）も当然まだ存在せず、当時は国内で大学教育を受けるということは、必然的にコペンハーゲン大学

で学ぶことを意味していたからである。結局、彼はラテン語学校時代から通算すれば、足掛け7年オーゼンセで学んだことになる。ラスクが、オーゼンセラテン語学校に入学したのは、ナポレオン戦争のあおりをくったデンマークが、コペンハーゲン港の戦いでイギリス艦隊に破れた波乱の年だったことはすでに述べた。そして、ラスクが大学に入学した1807年のコペンハーゲンも、同じナポレオン戦争に巻き込まれて、大国イギリスとフランスの覇権争いの狭間で、9月にイギリス艦隊の砲撃を受けて壊滅状態にあった。ラスクの大学生活は、瓦礫の目立つ首都での波乱の人生の幕を開けることになったのである。

(この稿続く)

参考文献

- Andersen, Poul. 1937. "Rasmus Rask", in: Selskab for Nordisk Filologi. *Fra Rask til Wimmer* (København), pp.7 - 33.
- . 1938. *Rasmus Rask: De fynske Bønders Sprog*, København.
- Antonsen, Ekmer H. 1962. "Rasmus Rask and Jacob Grimm: Their Relationship in the Investigation of Germanic Vocalism", *Scandinavian Studies* 34, pp.183 - 94.
- Bjerrum, Marie. 1956. "Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?", *Festskrift til Peter Skautrup*(København), pp.375 - 81.
- . 1957. "Hvorfor rejste Rask tik Kaukasus og Indien?" *Danske Studier* (September), pp.80-100.
- . 1959. *Rasmus Kristian Rasks Afhandlinger om det danske sprog*, København.
- . 1982. "Rask, Rasmus", *Dansk biografisk Leksikon*. 3.Udgave. XI, (København), pp.646 - 51.
- Christensen, Carl C. 1932. "Rasmus Rask—Hans død, og hvad han efterlod sig", *Danske Studier*, pp.1-21.
- Dideriksen, P. 1960. *Rasmus Rask og den grammatiske tradition*, København.
- Djupedal, Reidar. 1956.0 "Rasmus Rask og 'Videnskabernes Selskabs Danske Ordbog'", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.383 - 96.

- Dyggve, Holger P:N. 1932. "Tre ikke tidligere trykte breve fra Rasmus Rask", *Danske Studier*, pp.139-47.
- . 1933. "Finn Magnusen og Rasks store rejse", *Danske Studier*, pp.17-22.
- Flom, George T. 1939. "On the History of Views about the Vowel System of Old Norse", *JEGP* 38, pp.549 - 51.
- Fussing, Hans H. 1932. "Raskinana", *Danske Studier*, pp.148-56.
- Grimm, Jacob. 1812. "Review of Rask's Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog (1811)", *Allgemeine Literatur-Zeitung* 31-34. (Repr. in : *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4(Hildesheim,1991) , pp.65-73 ; 7 (Hildesheim,1991) , pp.515-30).
- . 1825. "Review of Rask's Frisisk Sproglære" in: *Göttingische gelehrte Anzeigen* (1826) , pp.81-107.(Repr. in: *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim,1991) , pp.361-76).
- 橋本淳他. 1999. 『デンマークの歴史』、創元社.
- Henriksen, Carol. 1996. "Rask, Rasmus Kristian", in: Harro Stammerjohann (ed). *Lexikon Grammaticorum* (Tübingen), pp.774 - 76.
- Hjelmslev, Louis. 1932 - 35. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*. 3 Binde, København.
- . 1933. "Rasmus Rask og Sverige 1812-18", *Nordisk Tidskrift för Vetenskap, Konst och Industri* IX, pp.445-56.
- . 1951. "Commentaires sur la vie et l'œuvre de Rask", *Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague*, Vol.XIV, 1973, pp.3 - 16.
- Hjelmslev, Louis. og Marie Bjerrum. 1941-68. *Breve fra og til Rasmus Rask*. 3 Binde, København.
- Horstbøll, Henrik *et al.* 1988-98. *Danmarks Historie*. 3 Binde, København.
- Jakobsen, Helge Seidelin. 1986. *An Outline History of Denmark*, København. (高藤直樹訳. 1995. 『デンマークの歴史』、ビネバル出版.)
- Jespersen, Otto. 1918. *Rasmus Rask*, København/Kristiania.
- . 1922. *Language: Its Nature, Development and Origin*, New York.
- . 1926. *Sprogets Udvikling og Opstaden*, København.
- . 1932. "Rasmus Rask", *Politikens Kronik*, 14.11.32.
- . 1938. *En sprogmands levned*, København.
- 秦宏一. 1975. 「ラスムス・ラスク」、月刊『言語』 Vol.4, No.9, pp.78-83.
- Jones, William.1786. "On the Hindu's", in: Lord Teignmouth. *The Work of Sir William Jones*. Vol.1(London,1807),pp.19-34.
- Kålund, Kr. 1897. "Bidrag til R.Rasks lævned", *Dania* 4, pp.129-43.
- Malone, Kemp. 1952. "Rasmus Rask", in: Thomas.A.Sebeok(ed). *Portraits of Linguistics*. Vol.1(Bristol, 2002), pp.195 - 99.

- Müller, P.E. 1833. "Nekrolog: Professor R. Chr. Rask", *Danske Litteraturtidene*, pp.1-31.
Ny kgl.Samling 389 ek 80 (Rasks dagbog 1818 - 32).
- Pedersen, H. 1916. *Et Blik på Sprogvidenskabens Historie*, København.
- . 1924. *Sprogvidenskabens i det nittende Aarhundrede: Metoder og Resultater*, København.
- . 1932. "Indledning", in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*, Bind I (København), pp.XIII - LV.
- Petersen, N.M. 1834. "Bidrag til Rasmus Kristian Rasks levned", *Samlede Afhandlinger af N.M.Petersen*. Første Del (København, 1870), pp.217 - 343.
- Rask, Kirsten. 2002. *Rasmus Rask—store tanker i et lille land*, København.
- Rask, Rasmus Kristian. 1811. *Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*, København.
- . 1817. *Angelsaksisk Sproglære tilligemed en kort Læsebog*, København.
- . 1818. *Undersøgelser om det Islandske eller gamle nordiske Sprogs Oprindelse*, in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*, Bind I, København, 1932.
- . 1818. *Anvisning till Isländskan eller Nordiska Fornspråket*, Stockholm.
- . 1825. *Frisisk Sproglære*, København.
- . 1826. *Forsøg til en videnskabelig dansk Retskrivningslære*, København.
- . 1830. *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue*. A New Edition (Trans. by B. Thorp), København.
- . 1932. *Kortfattet Vejledning til det oldnordiske eller gamle islandske Sprog*, København.
- Rönning, F. 1887. *Rasmus Kristian Rask. Et Mindeskrift i anledning af Hundredåsdagen for hans Fødsel*, København.
- 新谷俊裕 (訳注). 1988. 『オットー・イエスベルセン：ラスムス・ラスク』、大学書林.
- Skårup, Povl. 1964. *Rasmus Rask og Færøsk*, København.
- Sverdrup, Jakob. 1920. "Av Sprogvidenskabens Historie. Ihre - Rask - Grimm", *Nordisk Tidskrift för Vitenskap och Industri* I, pp.459-77.
- Søndberg, Olaf. 2001. *Danmarks Historie*, Århus.
- Thomsen, Vilh. 1887. "Rasmus Kristian Rask", *Vilh. Thomsen Samlede Afhandlinger*. Bind I (København/Kristiania, 1919), pp. 125 - 44.
- . 1925. "Rask, Rasmus Kristian", in: Chr. Blangstrup (ed). *Salmonsens Konversations Leksikon*. Bind XIX (København), pp.937 - 39.
- Thomsen, Vilh.(Kr.Sandfeld). 1940. "Rask, Rasmus Kristian", in: P. Engelstoft og Svend Dahl (ed). *Dansk biografisk Leksikon*. XIX (København), pp.180 - 94..
- Wimmer, Ludv. F.A. 1887. *Rasmus Kristian Rask*, København.
- Yamamoto, Fumiaki. 1986. "On Rask's Old English Grammar", *In Honor of Shigeru Takebayasi*

(Kenkyusha), pp.550 - 65.

山本文明. 1995. 「Rask, Rasmus (Kristian)」, 佐々木達・木原研三編. 『英語学人名辞典』(研究社), pp. 284 - 85.

———. 1996. 「ラスクRask, Rasmus Kristian」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編. 『言語学大辞典』第6巻(三省堂), p. 1518.